

英語 1 第 1 章 YOU 全訳

Introduction

Saito Yoshifumi

The Games of Robert J. Fischer の序文に、イギリス人のチェス指しで、著者の Harry Golombek は、その本に収められているチェスの試合の集まりを、「Bobby Fischer のプレイヤーとしての特有の性質」を表すものだと表現している。Bobby Fischer は、1972 年に世界チャンピオンになったが、その後すぐに奇妙なことに真剣な試合から手を引き、他のすべてのチャンピオンシップの状況を拒否し、結果として不戦敗によってタイトルを失ってしまった伝説のアメリカ人チェスプレイヤーである。

しかし、多くの棋譜はどのような種類のチェスプレイヤーの「特性」を表せるのだろうか。この Fischer の試合の集積物はその名人がレイキャビクでの世界選手権においてどのように独特に振舞ったか、失敗したかさえ私たちに伝えるのだろうか。それはルールや戦略の点において一般のチェスと何か独特に異なるものの記録なのだろうか。そんなことはない。その本の中にあるのは、最も美しくさされたチェスの試合以外の何物でもない。Fischer の「独特の資質」は超人的な方法において彼が精確に天文学的な数の指手から非常に限られた適切な手を選んで組み合わせ、相手に壊滅的な打撃を与える攻撃と、相手からの攻撃に揺らがない防御とを作り上げることに見て取れる。言い換えると、彼の独自性は厳格に決められたチェスの規則体系の範囲内において顕現する。Golombek はこう述べることで「unique」という語を使うことを急ぎ正当化している。

私は、彼のチェスは先人たちの影響をまったく受けていないとっているのではない。誰一人、いわば真空の状態からはじめることなどできないし、すべての人、まったくの素人から最上級のグランドマスターまで、は時代を超えたチェスの発展の、連綿と続く途切れることのない鎖の一部なのだ。

おそらく私たちはこの一匹狼のチェスの天才についてなされた明確な発言から、個人主義の時代には常に心に留めておかねばならないことを一般化できるだろう。あなたが今からかかわろうとし、深く没頭するようになる長い伝統や慣習の基本的なルールを知らずに、本当に「独特の」ものや、「独創的な」ものに出会うことなどないのである。

この文脈の中でもう一つ指摘しておきたいのは、独自性や独創性というのは、到達することを望む目的ではなく、あなたがその活動を通して、自分を成長させようとする努力に比例する結果として、無意識に得る特性なのだということである。それはちょうど、助けを求めるとすぐに飛び去ってしまうが、彼が賛同することによってあなたが最大限の努力をしているときに、気付かれないようにあなたを助けに降りてくるいたずら好きの天使に似ているのである。

Pablo Picasso の初期の芸術家としての経歴は独自性や独創性がどのようにして、伝統や習慣の既存の枠組みの中の、長い多大な労力を要する努力の結果として生まれてきたかを

示す。私たちは彼のキュービズムによる絵に大変親しんでいるため、彼は物を「独自の」方法で見る能力を賦与されて生まれてきたと考えがちであるが、それは正しくない。

Picasso は十代前半は慣習の代表のような画家として出発したが、基本的なスケッチを大量に自らに課すことで、徐々に自らの画法を形成していったのだ。彼の親友の一人は、彼が捨てたスケッチシートの山は長い冬の間、ストーブの十分な燃料になったという信じがたいほどの事実を証言する。彼の画法を真似すれば、あなたは無名の、第2のPicassoの亜流になれるかもしれないが、彼が通った過程を飛ばすと、決して彼のような存在になることはできない。

個人主義は民主主義の基本原理の1つであり、個人はともに作り上げる集合体、家族・社会・国家などに優先するという考えは、異なるレベルの人間関係の規範に浸透している。人々は個人として目立とうと、また他人とは「独特の」違いを持とうとしている。アメリカのテレビ番組は人々に「自分自身」であることを推奨している。しかし、軽々しく他人と異なろうと努力しても、変人であるという結果に終わることがしばしばある。私たちは人間社会のシステム全体の中でのみ「私たち自身のように」意味のある振る舞いのできるものであり、それゆえ、まず第一にシステムを学ぶために大いに努力する必要があることを常に気にかけておかなければならない。

このセッションに使用した文章は、シカゴ大学のNorma Field教授が2002年卒業予定の学生たちのために作った演説から取ったものである。これを読み、自分自身を育てるためにあなたは今、何をすべきか考えてみなさい。

ONLY YOU

Norma Field

私は、あなた方のどれほどがRobinson Crusoeを読んだことがあるかはわからないが、おそらくあなた方は、それは独力で社会の基本になるものを作り上げた、無人島に置き去りにされた男についてかかれた18世紀の小説だということは知っていると思う。いや、完全に独力というわけではない。なぜなら彼は、忠実な下僕であるFridayの力を、彼を人食い人種から救出した後に得たからである。Crusoeは多くの18世紀の思想家にとっては規範的人物であった。彼らはCrusoeに自然を支配することで文化を作り上げたという理想を彼に見出したのである。Karl Marxは、思想家たちはCrusoeを何もないところ、というよりは自然の中から急に現れた完璧に孤立した人間だと誤解しているとして痛烈に批判した。彼らは個人のように複雑なものを作るときに、歴史的に必要な過程を無視しているのだ(私は、あなた方それぞれが、自らのことを個人であり、複雑なものだと考えていると確信している。それで正しいのだ。)。彼は、「人類とはただ単に群れているだけの動物ではなく、社会の中でのみ、自らを同州の他の個体と明確に区別できる動物である。」と書いている。社会の外での人の活動について考えることについて、彼はこう続けている。「それは、共に住んで、互いに語る相手もない中での言語の発達と同じくらいばかげたものである。」彼

は個人の存在を否定しているわけではないことに注意してください。個人はもちろん存在しているが、それは Marx が社会的関係とよぶものから構成されたものとしてである。

Marx は社会関係を、権力に依存する、権力の差を生み出す経済過程の点から、詳しく説明している。非常にしばしば学者(銀行員や政治の専門家も)は、経済の過程が、どのようにお金から離れた人間の生活の詳細になるかについて考えることを忘れている。そこで、それをもう1つの目的から突き止めて、あなたが何者であるかという視点から社会の関係について考えてみよう。例えばあなたが文字通りに両親の生産物だとしたら、私たちは両親が出会った理由のすべてについて考えなければならない。私たちは他の家族のメンバーや、自らが育った場所、どんな学校に通っていたか、見た映画、親や友人の話す言葉(たとえ両方が英語だったとしても、それらは全く異なっていることもあるのだ)、あなたの着ていた服についても考えなければならない。重要なものは場所を含む物だけではない。重要なのは関係、あなたの生活の一部を作り上げている収入源・知識・技術・友人・隣人なのである。たとえば、あなたの服はあなたのために選ばれたものだろうか。あなたが服を買えるとしたら、そのお金は、自らで稼いだものだろうか、それとも自分に与えられたお金だろうか。あなたは車を使える立場にあるだろうか。それとも公共交通機関を自在に使える専門家になっていただろうか。

背景の多様性を体現する独特の存在であるあなたの能力とは何であろうか。私たちが社会的に生み出されている部分、分析する部分を大変誇張しすぎたので、私はしばらくの間、再び作り出す部分、むしろ、今の確固としたあなたに焦点を当てたいと思う。私は、ある児童書の編集者が、とても若い作家、いや実は未来の作家でまだ高校にいる人だが、に向けて送った手紙から引用することで、そのことを行おうと思う。

そして、あなたが私に伝えたことはあなただけが知っているということを忘れてはいけない。他の誰も、あなたが何について知っているかということを正確には知らない。そういうわけで、あなたの考えや感情を絵本の形で書きとめておくことは大変重要なことになるだろう。

その編集者の名前は Ursula Nordstrom であり、彼女は 1940 年から 1973 年まで Harper の児童書部門の管理者であった。彼女は革新的な存在であり、「悪い子によい本を」作ろうとした人物で、あなた方の多くは覚えているかもしれないが、Goodnight moon、Charlotte's Web、Where the Wild Things Are といった本を世の中に送り出したのだ。この引用文はアフリカ系アメリカ人の作家・イラストレータの John Steptoe への手紙からのものである。

私が始めてこの手紙を読んだとき、”only you” がすべて大文字であったので、私は即座に、これは編集者から駆け出しの作家に送るためだけではなく、教師が生徒に送るためにも素晴らしいことだと思った。私が明確に説明しようとしてきた理由から、それはどんな生徒に対しても当てはまるものなのだ。しかし Nordstrom は誰も、「誰もあなたが何について知っているかは知らない」と主張した後に、「考えや感情を書き留めておきなさい」と

助言していることに注目してほしい。私が思うに、彼女は、世界が能力ある若者の独特の知識を見ることができるとの重要性を強調していると思う。そしてこれは、絵本の形式ではないとしても、何度も何度も要求されるだろうことであり、感情ではなく考えのほうに重点が置かれるだろう(しかし、知識を形作る上では、感情的な動きがかなりの働きをすることを心に留めておきなさい)。あなたは自分の教育を、成長していく自分の知識を書き留める能力を通じたあなたが知っていることとの出会いの連続だとさえ考えるかもしれない。その結果としてあなたは中に入ろうと要求している新しい知識に対してより確かな視点を持つことになる。

私はもちろん比喩的に内側と外側の言葉を使っている。私たちが経験から知っていることを「あなただけが知っている」のは、知識とはあなたの内側で、奇跡的に何も無いところから発生するためではなく、あなた方のそれぞれは世界との相互作用における独特の歴史の積み重ねであるからである。その家庭に終わりはないが、私たちがそれについて関心を持つほど、世界に与えたり、世界から受け取ったりする活動は多くなる。

第二章 FAT

通学中の電車内で、周囲を見渡してみなさい。どこかで「ダイエット」という言葉を見つけるだろうことは疑いようもない。週刊誌または月刊誌の編集者によると、「ダイエット関連の記事を載せたものはいつでもよく売れる。」そうだ。私たちの社会は消費者に効率的に体重をおとすことを約束する、いわゆる「ダイエット」食品や運動装置であふれかえっている。なぜ人々は「体重をおとす」事に関心を持っているのだろうか。

まずはじめにこの問題を取り扱うよりも先に「太っている」ということは生まれついたある人の価値とは全く関係ないということ覚えておく必要がある。実際太めの人には落ち着いていて親切だと考えられていて、その一方で痩せた人は少し神経質だとみなされているかもしれない。社会全体としての特定の体系の好みは、時とともに変わり行く。将来的に太った人が好まれる時代がくる可能性は十分にある。

一方で人も生物である限り「健康である」ということは、絶対的な価値をもっていこう。20～30歳の平均的男性の体重の40%は筋肉であり、20%は脂肪である。この脂肪の全ては、不要なお荷物というわけではない。脂肪1gは9kcalのエネルギーになる。この数値は、グルコースの二倍のエネルギーの水準である。言い換えると、脂肪は人の体にとって最良のエネルギー源である。医学的にいえば、体脂肪率が10%をきると、体の様々な機能が低下するとされている。逆に体脂肪率が25%を超える一肥満と言われる状態になると、糖尿病や、心臓病にかかる可能性が高くなるのだ。

社会的な体系の好みを見無視すると、男性は、10～20%、女性は15～25%を保つのが、健康であるためには重要である。今日では、ダイエット、食事の量を減らすことで、脂肪を減らすことが、大変一般的になっているが、この方法では、脂肪同様筋肉の損失になるのだ。すると結果として、基礎代謝—生命維持に必要なエネルギー消費の減少につながり、それによって、実際には、より体重が増えやすい体になってしまうのだ。このセッションでは、体脂肪と健康についての関係の最近の発見を紹介するとともに、毎日のウォーキング活動を通して効率的に体重を落とす方法について話し合おうと思う。

私はボディービルダーだが、最近はやや忙しかったので、十分なエクササイズをしていない。私は腹の周りに少し脂肪を感じられる。専門用語で言えば、私が手にいれつつあるこのスペアタイヤは、皮下脂肪、つまり体脂肪からなり、スポーツ科学の分野では最近このトピックについて研究が急速に発達している。体脂肪は明らかにいいものではない。それは、アスリートだけではなく、私たちにとっても、悪いものである。それは、脂肪は私たちの体系に健康を脅かす大きな影響を与えるからだ。臨床実験では、肥満は、心不全や脳障害・糖尿病といった深刻な病気を引き起こしうるということが明らかになっている。しかし、肥満がこれらの病気を引き起こす実際の機構についてはいまだに明らかになっていない。

学者たちはその関連について、多くの複雑で精練された理論を考え付いているが、彼らは、「なぜ重くてはいけないのか。」という簡単な質問に答えることは難しいと思っている。しかし、脂肪組織は一種の内分泌器官であるということを示す最近の研究は私たちが健康と脂肪の関係を理解するのに役立つ。

脂肪組織は主に脂肪細胞からなっている。昔、脂肪細胞は、「レプチン」というホルモンを分泌していることが発見された。これは、脂肪細胞が本当に内分泌器官であると示したので大発見であった。レプチンは脂肪組織が中性脂肪を蓄積したときに分泌される。レプチンは中枢神経に作用し、食欲を減らし、交感神経を活性化させて脂肪の分解を促進する一方で、そうして太り始めた細胞をやせさせる。なぜレプチンが、体重を減少させる取り組みの中で、究極の武器だとみなされているかわかるだろう。しかし慢性肥満ではレプチンが大量に分泌されていると最近の研究で示されているので、レプチンの分泌が必ずしも体重減少に結びつくわけではない。最近では「アディポネクチン」と呼ばれる別のホルモンが発見されている。このホルモンは肝臓や骨格筋に影響して脂肪酸の代謝を促進しているように見える。これら二つのホルモン、レプチンとアディポネクチンは脂肪の代謝を改善する「良いホルモン」とみなされている。

しかし、脂肪細胞は体に悪影響を与えるホルモンを分泌していることが別の研究で示された。この”レジスチン”と名づけられた”悪い”ホルモンは脂肪細胞や肝臓・骨格筋でのインシュリンの働きを阻害する、普通の状況ではインシュリンは血糖値が一度上昇するとすい臓から分泌される。適量であれば血糖値が下がり、良い影響をもたらす。しかし、レジスチンの量が多すぎるとインシュリンが効かなくなり、血糖値が結果として下がらなくなる。この状況は「インシュリンレジスタンス」と呼ばれている。これが原因でこの厄介なホルモンが「レジスチン」と呼ばれている。「インシュリンレジスタンス」は基本的に糖尿病の初期の兆候である。言い換えると脂肪細胞は棟脳病の引き金を引く物質を分泌しているということが言える。

レジスチンに加えて脂肪細胞は”cytokines”と総称されるホルモンのような物質を分泌している。これらのサイトキネスの中の1つは、脂肪物質の血管への蓄積につながり、そうして動脈を硬化させて狭めることを引き起こしているようだが、それらは明らかに良いことではない。つまり脂肪細胞は、心筋梗塞や脳梗塞を引き起こす物質を分泌しているのだ。だから、私達は脂肪細胞がなぜ体に良くないかについて、適切な理由を少なくともある程度理解した。ここまではわかったのだが、私達は増やす傾向にある。不健康なスペヤタイヤを減らすために何をしていけばいいのだろうか。忍び寄る脂肪に抵抗するためには、どのような手段が実際にとれるのだろうか。「Step」というのが実際にはキーワードになるだろう。ウォーキングについて考えてみよう。

ウォーキングは近年、運動の形としては大変一般的な形態になっている。それは丁度ジョギングのように、有酸素運動の一形態として分類されている。しかしジョギングとは異なり、ウォーキングは関節や循環器にあまり大きな負担をかけないという利点がある。真剣

なアスリート達は、ウォーキングは体にあまり効果を与えない、あまりに簡単な運動だとして一笑に付するかもしれないが、しかし、それは正しくない。長い散歩をするということは、体脂肪の燃焼には大いに有効な方法であるのだ。その上歩くことは、毎日行わなければいけないものであるから、あなたがそれを意識して運動の一形態として取り入れれば、良い結果を積み重ねていくことができるだろう。

ウォーキングとランニングとは、全然違う運動の形態である。ランニングとは明らかに両足が離れている瞬間がある動きであると明確に定められている。図1にランニングとウォーキングの簡単なモデルを示す。歩いているときは人の重心は片方の足の真上にあるときに最高点に達する。言い換えると、歩いているときは私達は”逆振り子”のように左右の足が口語に動いているときに効率的に前進している。この動きはしばしば”転がる卵の動き”と特徴づけられる。一方走っているときは重心は足の真上にあるとき、実際には地面についている足の上にあるときに最低点に達する。この足は、体の重心を斜め前方に移動させるようにすることで、あなたを前進させるばねのような働きをする。この行動により、強力な推進力を得ることが可能になるが、次に自身を前進させられるようになる前に、重心が足の真上に来るまで待たなければならないため、スピードを落とさなければならない。

1973年にT. J. DawsonとC. R. Taylorは、有名な科学誌ネイチャーに、カンガルーの運動のエネルギーコストを研究している興味深い記事を出版した。カンガルーは、自らの速度が6 km/hになるまでは、手、足、尾を使って自らを前進させる。この点までは、消費されたエネルギーの量は、スピードの増加に比例して増えている。しかし一度、カンガルーの速度が6km/hになると、カンガルーは跳ね始める。この点では、興味深いことに、スピードは増加しているのに、消費されたエネルギーの量は一定である。これは、カンガルーの長いアキレス腱が効果的なバネとして働いているからである。人はカンガルーのような長いアキレス腱を持っていないが、似た現象が観察される。1938年にR. Margariaが言ったところによると、平らな地面では、7.5km/hまでは走るよりも歩くほうが必要なエネルギーが少いそうだ。しかし速度が上がるとそれは逆になる。このことは、7.5km/hになると、歩くより走る方が必要なエネルギーが少なくなることを意味する。そういうわけで、人はこの速度に達すると非常に自然に走り出すのである。仮に歩き続けようとするならば、速度が増すにつれて、必要なエネルギーも増加するだろう。

7.5km/h以下で移動している際に、必要なエネルギーが少なくなる理由は恐らく、人が二本足で効率的に歩く方法、図に示されたように逆振り子のように効率的に歩く方法を手にいれたためであろう。1km進むのに必要となるエネルギーが最小となるのは3km/h~5km/hで歩いた時だと一般に理解されている。それは、私たちの足の動きは固有に振動数をもっており、その自然な働きによって歩くとき、速度は大体3km/h~5km/hになるためである。恐らく歩くときの標準的な速度は4km/hだと聞いたことがあるだろう。そしてそれは、エネルギー保存の観点からは明らかに最も好ましい速度である。しかし、ウォーキングを運動

として取り入れる際には、エネルギー消費量が最小よりも多い速度で歩く必要がある。

7.5km/hで歩くとき、同じ速度で走るのと同じくらいのエネルギーを必要とする。その上、走るときの伸びる動きから発生する長期の筋肉疲労を避けることができる。7.5km/hで30分歩くと300kcalを消費する。もしもう少し遅い速度、5.5km/hで歩くと、同じエネルギーを消費するためには、70分間歩かなければならない。その上重要なことは、歩くときのエネルギーの半分は体脂肪から使用される。だからこのように運動をすれば、わずか一ヶ月でほぼ1kgもの体脂肪を落とすことが可能だということが分かるだろう。

3 TRADITION

多くの人たちはハワイと言うと暖かい日ざしや美しいビーチを連想する。そういったイメージは完全に誤りというわけではないが、実際のハワイの景色は多くの人たちが想像するよりも多様性に富んでいる。特に印象的なのは何千年も昔に火山活動によって造成された高い山々や深い谷である。1866年にアメリカの著名な作家、マーク・トウェインがカウアイ島を訪れた際、彼は深さ3600フィート以上のワイメア峡谷の壮大さに驚愕し、それを「太平洋のグランドキャニオン」と呼ぶことにした。他の島々も同じような景観を誇りにしている。マウイ島のハレアカラ山は12000フィート以上ある。ハワイ島にはマウナ・ロアがあり、高さ13367フィートである。そしてこの峰に隣接してそびえているのがハワイ諸島で最も高いマウナ・ケアであり、13796フィートある。

マウナ・ロアとはハワイ語で「白い山」と言う意味であり、その山の頂上がしばしば冬に雪に覆われるためそのような名前がつけられた。過去数十年において、天文学者たちはこの高い山の頂上が宇宙を観測するのに世界で最も適していることを利用してきた。標高、澄んでいて乾燥した空気、安定した気候、そして市街地の光からの十分な距離のために、科学者たちは天空から発せられる赤外線やサブミリ波の慎重で正確な観測ができ、そのおかげでいくつかの重大な発見もあった。結果としてマウナ・ケアの頂上は現在世界でもっとも大きな天文学の施設となっている。例えばW. M. ケック観測所には世界で最も巨大な光学望遠鏡と赤外線望遠鏡がある。それぞれの望遠鏡は8階建の高さがあるのだ！日本の国家的天文学観測所には、すばると呼ばれる巨大で非常に精巧な望遠鏡がある。他の国々も、例えばフランスやイギリス、ドイツもこの太平洋上の理想的な場から銀河系の調査ができる、独自の望遠鏡を所持している。

この「天文学産業」は一般的に、雇用を創出したり観光産業を増加させたりすることでハワイ経済に物質的な利益をもたらしたと考えられている。それに加え、多くの市民は自分たちの島が偉大な発見がなされる場と考えることをおのしらく思うようになってきている。しかしながら同時に、マウナ・ケアに天文学者がいることに対して複雑な思いを抱いたり、時として完全に反対する人たちも近年増えてきている。これはなぜならマウナ・ケアはネイティブハワイアンの人たちに神聖な山と考えられているからである。

今日のネイティブハワイアンとは、18世紀終わりにジェームズ・クック船長や他のヨーロッパ人、アメリカ人が到着したころに、もともとハワイに住んでいた人たちの子孫のことである。何世紀もかけて彼らの国、ハワイ王国は破壊され、多くの伝統は変化してきた。しかし多くのハワイアンは自分たちのことをネイティブハワイアンと考え続けている。現代の地方や連邦政府によってなされてきた、少数派の権利の認証への政治的な動きを通じて、より多くのネイティブハワイアンたち（また彼らを支援する人たちは）、彼らの伝統的な価値観や信条、言語を救出し維持していくことの重要性を見出してきている。このような人たちにとって、今日のマウナ・ケアの山頂の状態はある種侮辱である。なぜなら各

国の望遠鏡がかつてから、また現在もネイティブアメリカンにとっての聖なる地に建造されているからである。

天文学者はこれに反対している。彼らはマウナ・ケアは人類の進歩にとって必要不可欠と主張する。また人類すべて、もともとネイティブアメリカンも含めた人類すべてのために、彼らが新しい発見をし続けられるよう山頂を使い続け、これまで以上に発達した望遠鏡を導入したいと願っている。

次の2つの記事はこの両サイドの異なった立場を説明する。この対立が、未開と先進の衝突ではないと覚えておくことは重要である。ネイティブアメリカンは天文学者と同じくらい近代的で現代人である。彼らは今日の現代社会において、少数派として獲得した権利を行使しようとしているのである。また天文学者は科学のために科学を信仰しているわけではない。彼らは最低限ある程度、現代社会において環境を保護するのと同様に、ネイティブアメリカンの価値観を認めることの重要性は理解している。これがまさに2つの立場の異なった主張をより難しくしているのである。しかしこのような類の衝突は、科学的な進歩によって、特定の集団の価値ある伝統が脅威にさらされるといった形で、将来的にまた日本を含めた世界のほかの地域でも増えて行きそうである。

マウナ・ケアの山頂はハワイの人たちにとって様々なものの象徴である。マウナ・ケアの高層地帯はワオ・アクア、創始者であるアクアの領域にある。また最上の聖なる地とも考えられ、千年も前から科学的なポリネシアの口頭歴史や記録された歴史でもそのように知られている。そしてナ・アクア（神聖な神々）やナ・アウマクア（神聖な先祖）の家であり、ハワイの人たちの創始者と考えられているパパ（母なる地球）とワケア（父なる空）の接点でもある。それは言わば無限の広がりを持つ宇宙と神々の境目となっている。すべての尊敬におけるマウナ・ケアは、代々伝わるハワイの人たちの、創造へのつながりの頂点を象徴しているのである。

マウナ・ケアの問題は長く一触即発の状態である。これはなぜなら話し合いのうちに、宗教の自由や、私たちの生まれた地への精神的なつながりを持つといった、基本的な権利が無視されたり奪われたりしたためである。

ネイティブハワイアンたちの見方としては、マウナ・ケアを取り巻くこの問題は、政治的なものでも経済的なものでもない。これは宗教的で精神的な性質のものである。なぜならマウナ・ケアの高層地帯はワオ・アクア、創始者であるアクアの領域にあるからである。マウナ・ケアは聖地あるいは崇拝の地であるのだ。マウナ・ケアの聖地は人の手によって創られていないので他の聖地とは異なる。アクアが人類に天国をもたらすため人類のために創ったのである。そのため人間の法がその尊厳を支配することはなく、神々の法が支配するのである。

マウナ・ケアは多くの文化的スタンダードにとって典型的な崇拜の地ではないものの、我々の文化的な理解や哲学において、それは最上級の聖地である。場の尊厳は、場の本質とマウナ・ケアにおいて決定され、私たちが神聖なアイナ（大地）を歩くとき、私たちは私たちの意志の領域を歩くのではなく、神々の意思の領域を歩くのである。まさに命の息吹を二度とない、瞬間のうちに捉えられるのがここなのである。生気を与える水が湧き出すのもここだけなのである。人間が受け入れられ、祝福され、開放されそして天国にしたがって変換されるために、天国が開くのもここだけなのである。カフ（宗教上の守護神）のように、私たちのこの聖地に対するクレアナ（責任）はずっと続いているのである。マウナ・ケアの尊厳を主張し、それを守っていくのは私たちの義務であり、そのためにその持つ偉大さと目的が人類全体に分かち合えられるのである。私たちはこの活動を続けることが許されなければならない。

不幸なことに、この愛するハワイの歴史はすべてをさらけ出しすぎ、私たちの大地はわしづかみにされ、文化は価値を落とされ、また私たちの本質は以前のものがわからなくなってしまふほど消費され、換えられたのである。私たちが存在する今、物質的なものが取り去られても、神々に対する私たちの義務は奪うことができないことを知っている。

それぞれの文化に、人類に与えるものがあるように、ネイティブハワイアンの文化にもある。私たちは、人類の集約された知識に先祖の知恵をもって貢献するため、これまでどおりの道を続けられるようアクアに頼んできた。私たちはまた聴衆に、天国の聖地に入ったものは天国の法に縛られると言われているので、ワオ・アクアの法と創造者の地への崇敬と尊敬の維持の責任を認めるよう頼む。

もしリリウオカラニ女王が今日に生きていたなら、彼女はもしかして天文学者だったかもしれない。この考えは、星空の下ハワイの天文学者とマカリイというカヌーに乗ったネイティブハワイアンのグループと一緒にセイリングをして楽しく過ごしていたときに思いついた。1893年に退くまでハワイに最後に君臨していた君主、リリウオカラニは偉大な知性と創造性を備えた女性だった。彼女は詩に情熱を持っており、有名な“アロハ・オエ”を含む百を超える歌を作曲し、数ヶ国語話すことができた。彼女は大統領や女王、王と共に会食した。また非合法に王国がのつとられた後も、ハワイの人たちの権利のために不断に闘った。

しかしとりわけ彼女は抑えがたい知識欲の持ち主だった。1898年の自著、“Hawai’ i’ s Story by Hawai’ i’ s Queen”の中で次のように語っている。“知識の獲得は私の人生全体における情熱であり、現在においてもその魅力を失わない。”

私が想像するにもし彼女が今日に生きていたならば、ハワイアンに対する愛情と知識への欲望という彼女の2つの大きな情熱が、マウナ・ケアの山頂で共に多くの問題を抱えて

いることに対して悲しく思うであろう。「ホワイトマウンテン」の望遠鏡によってなされた、宇宙に関する多くの驚くべき発見はきっと彼女を魅了したことだろう。

ひょっとするともしかして、少女リリウオカラニは天文学者になろうと思ったかも知れない。

マカリイ（ハワイのカヌー）に乗りながら、私たちは皆、なんとなんらかの道で探検家であることか、と考えた。これは人間の性質の一部なのである。地平線を越えて何があるのか、古代ポリネシアンを新世界に向けて船出させた好奇心と、銀河の海を越えた世界を学ぶため、今日の天文学者に天を観察させる好奇心とは同じなのである。

それなのになぜ、現在こんなにも多くの議論がマウナ・ケアを取り巻いているのであろうか。

多くの非難は天文学者のものである。長年にかけて、天文学者たちは無視や尊大さを通じて、一部のハワイの人たちにとってのマウナ・ケアの神聖さに対して思いやりがなかった。より巨大でより性能のよい望遠鏡を建設したいという熱望によって天文学者たちは、科学とは世界の単なるひとつの指標にすぎないのであり、そのため自分たちとは違う世界の見方に敬意を表ししなければならないということを忘れた。マウナ・ケアは望遠鏡がそこに建設されるよりもずっと以前からハワイの人たちにとって聖なる地であったのであり、天文学者たちはこの神聖な場の威厳を保存するのを助ける道義的な義務を持つのである。

しかし異文化への思いやりというのは双方向なものである。科学もまた文化であり、文明の夜明けまでさかのぼることのできる古いものである。現在の天文学は人種、宗教そして言語を超越している。一部のネイティブハワイアンや環境団体の、マウナ・ケアの望遠鏡の廃止や将来的な開発の禁止への要求にもまた文化的な思いやりがない。なぜなら彼らにとっても最終的な精神の探求となる宇宙の探検にともなう、天文学者が山に感じる親近感を無視しているからである。

確かに、これから先もハワイの人たちのマウナ・ケアに対する敬愛を、近代社会では的外れの単なる古代の迷信の名残と考えたり、自分たちはマウナ・ケアにどんな望遠鏡も望めば建設を許されるべきだと考える天文学者もいるだろう。

同様にネイティブハワイアンの中にも、マウナ・ケアに天文学者が存在することを、外国の侵略者が自分たちの国をいまだ支配していること目で見られる例だとして、すべての望遠鏡を排除し山を元の姿に戻さなければ満足しないという人もいるだろう。

しかしこれらの2つの極端な見解には我々の多くに占められた、共通の基盤がある。私たちのケイキ（子供）がハワイアンだろうがなかろうが、文化的遺産を守るため、星を学ぶため、彼らの望むようにマウナ・ケアを礼拝し、常に歓迎されていると感じられるのを確かにするほど、このハワイの島々にはアロハスピリットがある。わたしたちは怒りや、過去の権利の侵害における罪にとらわれて過去に生きることはできない。

リリウオカラニ女王が言うように、“世界はとどまることはできない。私たちは前進か、または後進しなければならない。”

私はマカリイをヒロ・ベイの入り江につけ岸边に戻っていきながら、もしリリウオカラニが今日生きていたら、彼女は確かにマウナ・ケアの山頂にはハワイアンとノンハワイアン、天文学者と非天文学者、みんなの居場所があると言ったに違いないと考えた。

赤字の部分は未確定

導入

フェルマーの最終定理の歴史は、17世紀のフランス人数学者 Pierre de Fermat が自分が読んでいた数学書の余白にラテン語で次に述べるこちらをからかうような文を書いたことから始まる。「3乗の数は3乗の数2つの和にはならず、4乗の数は4乗の数2つの和にはならない。そして一般的に2乗より大きな任意の累乗の数は同じ指数の累乗の数2つの和にはならない。私はこの定理について実に驚くべき証明を発見したが、その証明を記すにはこの余白は狭すぎる。」

フェルマーは、方程式 $x^n+y^n=z^n$ は $n \geq 3$ の場合、自明でない整数解、すなわち $xyz \neq 0$ を満たす整数解をもたないと主張した。しかしフェルマーが言うには、その余白には彼が発見した素晴らしい証明を書き記すのに十分なスペースがない、ということだった。この定理に対して、その後何世紀にも渡り多くの優れた数学者が挑んだ。これは、フェルマーが証明することなく作成した数学に関する幾つかの記述のうち最後まで証明されずに残ったものだったのでフェルマーの最終定理として知られている。

フェルマーがこの証明抜き定理を考案してから300年以上も後になって、東京大学の谷山豊と志村五郎という二人の若い日本人数学者が、当時全く知られていなかった論理的つながりによってフェルマーの最終定理と結びついた、この問題解決に重要な手がかりを発見した。その手がかりとは、楕円曲線とモジュラー形式という数学における二つの主たる題目の、全くもって予期せぬ驚くべき関係であったのだ。楕円曲線が古代ギリシャまでその歴史をさかのぼれ、フェルマー自身がその復活に一役買うほど長い歴史を持っているのに対し、モジュラー形式の研究は、ほんの19世紀までしかその歴史をさかのぼれないような比較的新しい分野である。これらの起源によって、両者は全然別の題目であると思われるため、その間のつながりを立証することは数学的に偉大な業績であると考えられた。

1993年、Andrew Wiles は谷山と志村によって発見されたつながりの大部分の証明を発表し、それによりついにフェルマーの最終定理を解き終えた。彼の発表は7年間一人で努力した成果であった。しかし彼の発表はまだ完全にフェルマーの最終定理の物語のハッピーエンドになったわけではなかった。発表後少ししてから、その証明に重大な欠陥があることがわかったのだ。1994年にフェルマーの最終定理が最終的にそして決定的に解決される前に、Wiles は世界中からの集中的な興味の視線にさらされながらも一年努力の日々を耐えなければならなかった。

このセッションでは、どのように谷山と志村が東京大学キャンパス内で出会い、その共同作業によりどのようにして、最終的に数学史上最も重要な発見のうちの一つを導くことになった理論を綿密に作り上げたかについて紹介しよう。

フェルマーの謎

1954年1月、東京大学のある若く才能のある数学者がいつものように、彼の部門の図書館を訪れた。志村五郎は *Mathematische Annalen* 誌の第24巻を一冊探していた。特に、ドイリングが書いた虚数乗法の代数理論の論文を探していた。特に厄介で難解な計算の助けとして必要だったのだ。

だが、その巻はすでに貸し出されていたので、志村は驚くと同時に困ったなと思った。借りたのは谷山豊であり、彼はキャンパス内の、志村とは反対側の場所に住んでいて、志村にとってはそういえばそういう人もいたなあ、という程度の知り合いであった。志村は谷山に、厄介な計算を終わらせるためにその雑誌が至急必要であることを説明し、いつ返却予定かを丁寧に尋ねる内容の手紙を送った。数日後、志村の机の上には一枚のはがきが置かれていた。谷山は、彼もまた丁度同じ計算に取り組んでいて論法上の同じ点で行き詰まっている、と返事を書いたのだった。谷山は、お互いに考えを出し合って、よければ一緒に問題を解決してはどうかと提案した。一冊の図書館の本をめぐるこの偶然の出会いによって、数学史の流れを変えることになる共同研究が始まった。

1954年に彼らが出会った頃、谷山と志村は丁度数学者としての仕事を始めたばかりであった。伝統的に若い研究者は、彼らのまだ羽根が生えたとの頭脳を導く教授の指導を受けるものであったが、谷山と志村はこの形の見習い期間を拒否した。第二次世界大戦中、実質的な研究は停止してしまっていて、1950年代になるまで数学の教授陣は復活しなかったのだ。志村曰く、教授陣は「疲れ果て、やる気もなく、幻滅している状態だった」。それに比べ、戦後の学生たちは情熱的で学ぶ気に満ちあふれていたのだ。彼らはすぐに、前進する唯一の方法は自分たちで自分たち自身に教えることであると悟った。学生たちは定期的にゼミを開き、最新の技術や発見を順番に教え合った。普段は投げやりな谷山であったが、ゼミでは猛烈な推進力となった。彼は、年上の学生には未知の領域を探求するよう勇気づけ、年下の学生に対しては父親的な役割を果たした。

谷山はうっかり者の天才の典型であり、それは彼の外見にも表れていた。彼はきちんと靴紐を結ぶことができなかつたので、一日に何回も靴紐を結ぶくらいならいっそのこと靴紐を全く結ばないことにした。志村が几帳面である一方、谷山は怠惰と言ってもよいほどだらしなかつた。驚いたことに、これが志村が素晴らしいと思った谷山の特性なのであった。志村曰く「谷山は多くの間違いを犯す才能に恵まれている。それもほとんどが正しい方向に。私は彼のこの才能をうらやましく思い、彼の真似をしようとしたが、結局良い間違いを犯すことが非常に難しいことが分かっただけで徒労に終わったよ。」

学生たちは西洋から遠ざかっていたので、ゼミでは時折ヨーロッパやアメリカでは一般的に流行遅れだと考えられている題目を取り扱った。谷山と志村は、とりわけ時代遅れな題目であったモジュラー形式の研究に興味をひかれた。モジュラー形式は数学の中でも最も奇妙で不思議な研究対象のひとつであった。モジュラー形式は数学の中でも最も難解な存在のひとつであるが、20世紀の数論者マルティン・アイスラーはモジュラー形式を五つ

ある基本的操作のうちのひとつだと考えた。すなわち加法、減法、乗法、除法、モジュラー形式の五つということである。モジュラー形式には無限の対称性を表すという面白い特性がある。谷山と志村が研究したモジュラー形式は無限通りの方法で移動、切り替え、交換、反射、回転が可能で、しかしなお元の状態を保つため、数学の研究対象の中でも最も対称性を有している。

不幸なことに、モジュラー形式は描くことはもちろん想像することさえできない。なぜなら、モジュラー形式は双曲空間と呼ばれる四次元空間に存在するからである。人間はありきたりの三次元世界で暮らすことを余儀なくされているので、双曲空間を理解し取り扱うのは難しいが、四次元空間は数学的には妥当な概念であり、モジュラー形式にこのような非常に高度な対称性を与えているのがこの特別な次元なのである。画家のマウリッツ・コルネリス・エッシャーは数学的な発想に惹かれ、自分のエッチング作品や絵画の一部に双曲空間の概念を持ち込もうと試みた。図1はエッシャーの *Circle Limit IV*だが、これは双曲世界を二次元のページにはめ込んだものである。

モジュラー形式は数学の中では非常に自立した存在だ。とりわけ、楕円方程式とは全く関係ないように見える。モジュラー形式はとてつもなく複雑なもので、研究される大体の理由がその対称性であり、19世紀になって初めて発見されたのだ。楕円方程式は古代ギリシャまでその歴史をさかのぼることができ、対称性とは何の関係も持っていない。モジュラー形式と楕円方程式は数学の世界の中でも全く異なる領域に存在し、誰もこの二つの中にわずかでもつながりがあるなどとは誰も信じたりしなかったであろう。しかし谷山と志村は、楕円方程式とモジュラー形式は実質的には同一のものであると言って数学界に衝撃を与えた。この二人の無所属の数学者によると、モジュラー形式と楕円方程式の世界は統合することが可能であるということだった。

1995年9月、東京で国際シンポジウムが開かれた。これは多くの若い日本人研究者にとって、世界の他の国々の研究者に自分たちが学んだことを誇示するまたとない機会だった。彼らは自分たちの研究と関係のある36の問題を一つにまとめて配った。それにはつつましやかな導入が付いていた——これらはまだ解決されていない数学の問題です。じっくり準備したわけではありませんので、これらの中には自明なものやすでに解決済みのものもあるかもしれません。参加者の皆さんにはこれらの問題のうちどれか1つにでも論評を加えていただけたらと思います。

これらの問題のうち4つが谷山によるものであり、それらはモジュラー形式と楕円方程式の不思議な関係をほのめかしていた。これらの無邪気な問題が、最終的には数論の革命を引き起こすことになるのだった。そのシンポジウムで谷山が出した問題はすべて、各々のモジュラー形式は実は姿を変えた楕円方程式であるという彼の仮説に関係していた。全ての楕円方程式はモジュラー形式と関係があるという考えはとても奇妙だったので、谷山の問題を見た者はそれらを変な意見としてしか見なさなかった。谷山の唯一の理解者である志村は、谷山の考えには力と深さがあると信じていた。志村はシンポジウムの仕事をし

ながら、その仮説を世界の他の国々の研究者が無視できないレベルにまで発展させようと谷山とともに努力した。志村はモジュラー形式と楕円方程式の世界の間にある関係を裏付ける証拠をもっと見つけたかった。1957年、志村がプリンストン高等研究所に招待されて、二人の共同作業は一時的に停止してしまった。アメリカで客員教授として過ごして二年の時が経ち、志村は谷山との共同作業を再開しようとした。しかし、この共同作業は決して再開されることはなかった。1958年11月17日、谷山豊は自殺したのだった。

短い経歴の間に谷山は数学に対して多くの急進的な考えを提案した。シンポジウムで彼が出した問題には彼の素晴らしい洞察が含まれていたが、彼の洞察はあまりにも時代に先んじていたために、それが数論に計り知れない影響を与えるのを彼自身が生前に見届けることはなかった。ハーバード大学教授 Barry Mazur は谷山-志村予想の出現を目撃した人だ。曰く「それは素晴らしい予想でした。しかし、あまりにも時代に先んじていたので、最初は無視されてしまったのです。初めてこれが提案されたときは、あまりにも衝撃的であったため、取り上げられることはありませんでした。一方には楕円曲線の世界が、もう一方にはモジュラー形式の世界があります。どちらの数学分野も集中的に研究されてきましたが、別々に研究されてきました。そこに谷山-志村予想が現れたのです。これは全く異なる二つの世界の間には橋がかかっていることを告げる重要な予想でした。数学者は橋を架けるのが大好きなのです。」

数学における橋の価値は莫大なものである。その橋によって、遠く離れた島々に住んできた数学者の集まりが意見を交換し合ったり互いの世界を探検したりできるようになる。数学は無知の海に浮かぶ知識の島々から成り立つ。たとえば、外形と形状を研究する幾何学者たちでいっぱい島もあれば、数学者たちが危険性と可能性について議論する確率の島もある。そのような島々が何十何百もあり、それぞれの島で独自の言語が使われ、その言語は他の島の住人には理解不能なのだ。谷山-志村予想は、二つの島をつないで、初めてお互いの住人が話すことを可能にするであろうという素晴らしい潜在力を秘めていた。谷山-志村予想はモジュラー形式の世界を通して楕円問題に近づくことで、数学者たちがそれまで何世紀もの間未解決のままであった楕円問題に取り組むことを可能にしたのだった。

5-OBJECTIVITY 全訳

Introduction

物事は数値化されるとそれら自身の実体を持つように思える。例えば偏差値や視聴率、教育的な評価や調査による評価までも考えてみよう。いったん物事が数値に置き換わると、客観的で普遍的に適用できる、つまり脈絡がなく、どこでもあてはまるような物事になるように思われはじめる。

この節のための文章はある特定の数が定義された瞬間に戻ることの重要性とその数が生み出された過程を注意深く考えることの重要性を主張している。立ち止まってその数の定義の中で何が無視されていて何が重要とみなされているかを考えることは良い考えだ。あるいは別の言い方をすると、どのように「雑音」と「信号」が区別されてきたのか。このような種の判断によると、近似化の方法は異なり、算出の仮定も異なり、今度はそのことが異なる数値を導きだすだろう。近似化の過程や仮定の構築を省いたり、算出された数値を普遍的に適用できる客観的な結果として扱ったりすることは重大な誤りだ。

「国際化」は今日の世界のどこにでもあるキャッチフレーズである。例えば「世界標準」といった一般概念で話すことは、どのような文脈やどのような文化でも受け入れられる世界標準や変数といったものが実際にあるという考えを促進させる。しかしながら、普遍的に受け入れられる標準的な変数があるということは本当に真実なのか。実際には重要な変数はいつも故意に選ばれたもので、問題になっているある特定の調査計画のテーマや目的に依存するものである。重要な変数はこの理由から文化的、歴史的な文脈に従って変わる可能性が高いものである。国際化が文化的に特定の変数の強制的な輸出につながるということは心配なほど起こる可能性があることだ、つまり強力な文化の変数が、その変数がおそらく全くもって不適當であるだろう他の文化にたやすく押し付けられてしまいかねないということだ。このことは今日の科学技術社会論の中心にある主要な問題のひとつだ。

本文（客観性と査定の過程）

たとえば物理学や化学といった近代の実験に基づいた科学の理論的な枠組みは仮説的で理想化された体系に基づいている。物理学者として私の友人がかつて物理学は近似化の科学だと言った。言い換えれば、物理学はいつも本質的なことと無視できることを区別しようと努力している。物理学が本質的だと解釈した要素だけがさまざまな公式の形で表現される。その一方で無視しても差し支えないものはすべて無視される。それゆえその問題はいつも近似化を通して解決される。

たとえば高校物理では摩擦や空気抵抗は簡潔な運動方程式を引き出すために無視される。しかし私たちが覚えておかなければならないことは、実験室や理想化された体系だけでなく高校での近似化でも無視されている摩擦や空気抵抗は実際には職務中になされる実用的で応用的な科学の本当の本質の大部分を構成している。「信号」(S) を考慮しなければなら

ないものとして、「騒音」(N) を無視できるものとして理解するときは、私たちは SN 比が実験室的な（つまり理論的な）科学と現場での（つまり実際の）科学の間でかなり異なっているかもしれないという事実を見失わないようにしなければならない。

信号と騒音、つまり重要なことと重要でないことの定義におけるこのような種の相違、不一致とさえいってもよいが、は名古屋で1990年代に起きた干潟の埋め立てについての議論のなかにとってもはっきりとみられる。1994年から1998年の間に名古屋市と名古屋港の機関は藤前干潟の一部を埋め立てることを目的とするプロジェクトの査定を行った。公聴会がそのプロジェクトが潜在的に環境に与える影響についての公式の査定について議論するために開かれた。その地域の住民はその計画に強く反対し、公式報告の環境査定にもきっぱりと反対した。最終的に名古屋市長は1999年にその計画をあきらめざるを得なくなった。

重要な問題はどのように「使用割合」を算出するかであった。それは例えばシギやチドリといった鳥たちがどれだけ提案されたプロジェクトの対象となる地域を使っているかを示すことを目的としたデータであった。論争の中心にあったのは提案された埋立地がシギやチドリが冬をすごすために飛んでくる干潟を根本的に変えてしまうだろうという事実だった。その地域はこれらの鳥のための国際的に認められた日本の冬の港だった。

「使用割合」のようなものは客観的な測定の種類に思えるかもしれないが、実際には一方、そのプロジェクトの推進派と他方、独自の調査を行った独立した非政府組織とが計算した使用割合の間にはとても大きな差があった。市の査定はその割合を 0.0%から 10.7%の間のどこかであると算出した。他方で、NGOはその割合を 31%から 96%の間であると算出した。この不一致はどのように使用割合を決めるかの定義の違いから結果として生じた。プロジェクトの推進派では使用割合は「昼間に提案された地域を、そのとき水没しているかどうかに関係なく、使っている鳥の割合」確かめた結果として定義された。対照的に、NGOが使った定義は「提案された計画の地域が水没していない間にどれくらいの割合の鳥がえさを食べているか」であった。市はNGOの使用割合の定義を「鳥がその土地をもっとも使いやすい状況で行われた調査はただ単に鳥の日常生活の1つの側面を観察しただけにすぎない」という理由で批判した。

プロジェクト推進派は自分達の調査を行い、4日分のデータを集めた。1994年の2/15、5/12、5/19、そして9/6。5/19は小潮、乃ち潮の満ち引きの差が最も小さくなる日であり、残る3日はその逆で最も大きくなる上げ潮の日であった。これらの日は年間の平均値を算出する目的で選ばれた。その調査というのは、ある指定された場所での鳥の数を日の出から日の入りまでの間の1時間毎に数えるというものだ。言い換えれば、1日の平均値を算出する為に、この調査は土地が水没していようがしていまいが日の出から日没までの1時間毎のデータを使ったということだ。これは、最後の算出は「日の出から日没までに指定された全てのエリアで観測された鳥の総計数の内の埋立予定地に

来た鳥の数の率」に基づいているということの意味していた。

一方で NGO も調査を行い、プロジェクト推進派とは異なる4つの日のデータを集めた。1994年2/17、3/27、4/24そして5/8である。これらの日は NGO が、干潟を鳥が一番使いそうな時に鳥の観測をできる様に選ばれた日であった。NGO 調査員は指定区で干潮3時間前から満潮3時間後迄の1時間毎に鳥の数を数えた。このやり方はその土地が最も頻繁に鳥に利用される時間帯に焦点を当てており、これらの日やこれらのやり方によって NGO は使用率（使用割合）を「全ての指定区の鳥の数の総計中の、殆ど干潟が水没していない時間における藤前干潟に餌をとりにきた鳥の数の割合」と定義した。プロジェクト推進派と NGO の調査結果においてあの様に差を生じさせたのは、日の選び方と使用率の定義の相違なのだ。

ならば、干潟を埋め立てるという名古屋市の計画を推進するかどうかを決定する上で、どちらの使用率を採用すべきであったのか。プロジェクト推進派は無作為抽出を使っており。これこそ「客観的数値」として捉えるべきだと主張していた。一方で NGO 側は、指定区が最も頻繁に使用された時間帯から抽出した代表的な数字こそ正しい使用率であると主張した。

プロジェクト推進派と NGO との間の議論の核心は、使用率の定義の仕方、その近似方法、そしてどの種のサンプルがデータに使われるべきかという問題である。2つの調査は測定タイミング（いつデータを収集したか）の点で異なるだけでなく、実際の測定方法の点でも異なっていた。これらの差異はどう近似すれば（見積もれば）ベストか、近似の中で何が強調されるべきかということでの異なる意見により生じた。言い換えれば、何を無視できて何を不可欠なものとして捉えなければならないか、要は、S/N 率の食い違いがあったわけだ。プロジェクト推進派は、使用率は無作為抽出によって見積もられるべきだ、つまり、1年を通しての平均を確定することによって、そして1日の平均を確定することで近似化すべきだと確信していた。これはデータを特定の期間にあの特定のやり方で集めるという彼らの決定の基盤である。一方で NGO は使用率を、鳥が最も指定区に集中する間に焦点を当てることで見積もりをした。これら2つの近似方法のどちらが埋立予定地の影響の査定に用いられるべきなのか。

NGO の使用率の数値は、現場で得たその地域の知識を反映するよう作られている。一方プロジェクト推進派の数値はエンジニアプログラミングにさえ使われうる手段としてや、理想的な工学システムに適している数値として見なされている。しかしこの科学的ランダムシステムに基づく理想化された計算では、干潮と満潮の違いが無視されてしまっていた。NGO のやり方はそれにも関わらず潮の差を無視してはいけない不可欠なものとして捉えようとした。これは理想と現実の間で生じた S/N 率の相違の良い例である。

名古屋での議論の核心にある基本的な問題は、「どちらがより科学的なのか」という見地のもとで見積もり（近似）や計算方法の定義における違いを議論してきたことである。プロジェクト推進派は、どんな工学計画にも使われる無作為抽出が「客観的数値」とであると

主張した。推進派は近似された査定で科学をつくり、査定の過程にはいつもある価値判断が含有されることを認識しなかった。彼らは自分達の科学的方法の限界を認識できなかった。NGO が提案した異なる形での客観性には対応できなかったわけだ。それは実際の地域状況という現実と一致した数値を持ち出す必要性を含んでいたのだが。プロジェクト推進派には見積もられた査定には必ず近似が含まれており、近似には必ずなにが重要でなにが無視できるかといった相対的な重要性に関する価値判断が含まれるということが理解できなかった。彼らは、全ての所謂客観的データの用意に含まれるものの一部であるこのような価値判断は不可避にデータの集め方やデータの性質そのものに影響を与えるということを理解し損ねたわけだ

英語 I Session6 全訳

我々が「プルシアンブルー」とは何であるかを知っていると言うとき、知っているという何を何だと考えているのだろうか。百科事典を開けば、この特定の色についての比較的詳細な説明を容易に見ることができる。それは、ドイツとフランスで1704年にほぼ同時に発見されたもので、動物の血または肝臓からできた一種のナトリウム塩が加熱され、硫酸鉄を加えられたときに偶然得られる青い沈殿物からなる無機顔料である、とおそらくわかるだろう。また、この色に関する他の多くの出来事や説明を目にすることもできるだろう。そしてそれらは、例えば、なぜこの特定の青色が「プルシアン」と呼ばれるのかなどということを理解する助けとなるだろう。

このようにして、「プルシアンブルー」という色についての多くの情報を得ることができるだろう。これは、その色は何であるかを今知っているという意味なのだろうか。確かに、今となってはそれについての様々な質問に答えることができ、この意味では、その色についていくらかの「専門的」知識を今持っていると言うことができる。しかし、以前にその色を一度も見たことがなく、読んだ説明に実際にプルシアンブルーを表したものがなかったらどうだろうか。その色がどのように見えるかがまだ全くわからないのだから、その色の本質的な特徴を把握したとはおそらく感じられないだろう。実際に、いくつかの濃淡の異なる青色を見せられたら、それらの中でプルシアンブルーを特定することは、まだできないだろう。

「百聞は一見にしかず」という有名な諺は、この状況によく当てはまる。この諺によれば、直接の経験によって得られた知識は、間接的な記事や記述によって得られる知識と比べて本質的に異なっていて、時にはより重要であるということだ。その諺がとてもよく当てはまるようにいくつかの種の物事や出来事がある。色はこの種の物事の中で最も典型的な場合のうちの一つだが、感覚や様々な感情の場合でもまた、似たような状況を目にすることができる。

例えば、腰痛とはどのようなものであるのかを知ることは何を意味するのだろうか。10年以上前、私は突然、背中に激しい痛みを起し、動き回るのが難しくなり始めた。この経験をする前から、誰かが腰痛だと言うとき、それが何を意味するのかを私は理解していて、その人に同情することができると考えていた。しかしそれを自分自身で経験した後は、腰痛に苦しむ人への同情的な理解はさらに深くなった。少なくとも、私にとってはそう思えた。

また、例えば、子供を失ったときに親が感じるような悲しみがどのようなものかを知ることは何を意味するのだろうか。たとえ我々が彼らの状況に深く同情したとしても、彼らの悲しみの中には、我々が経験することのできない根本的な要素があるように思われ、この意味で、彼らの悲しみを我々が理解し知ろうとすることには、打ち破ることのできない本質的な限界がある。たとえ我々が彼らの状況についてどんなに多くの情報を持っていた

としてもだ。

我々はよくこのような状況を次のように表す。我々が「内側」からしか理解できないものが世界にはあるのだ、と。この「内側」の空間はふつう精神や魂の空間と呼ばれ、この「内側」と「外側」の関係に関わる問題は哲学者たちの間で「心身問題」と呼ばれている。重要なのは、我々がこの「内側」に、部屋の内側に達するのと同じようには達することができないということである。つまり、我々は閉じた鞆を開いて内側にあるものを見つめるようにはそれを開くことができないのである。苦痛や悲しみの内側の側面は外側の（身体的・生理学的な）側面と同様には扱うことができず、心を知ることと体を知ることが本質的に異なっているのだ。

おそらくあなたはこれらの例に暗に含まれる意味が少し曖昧だということに気づいているだろう。一方で、これらの例は、内側を知ることが他人に対する理解を深めたり高めたりするために重要であるということや、内側を知ることが対人関係を強めることに貢献するということを示している。他方で、これらは逆の方向に解釈される可能性もある。これらの例は、私の状況と他人の状況は厳密には同じではないので、他人の経験を我々が理解し知ることには常に本質的な限界があるということを示し得るのである。

この曖昧さは極端な意味で次の例により明らかになる。誰もが、すべての人はある時点で死に、人は自分自身の死を受け入れなければならないということを知っている。私は自分の死を避けることができず、誰も私の代わりに死ぬことはできないということを知っている。この意味で私の死は人生の中で遭う最も私的・個人的な出来事である。しかし、私は自分が死ぬということがどういうことなのか知っているとと言えるのだろうか？ 私はそれを他の誰よりもよく知っているとと言えるのだろうか？ 明らかに、否である。なぜなら私は死を体験したことがないし、それに死を経験してしまったら、私はもう死んでしまったので、死についてのいかなる知識も持てる立場にいないからである。この意味で、私が自分の人生における最も根本的で私的な出来事について純粋に知ることは論理的に不可能である。確かに、私は生物学的、社会学的、心理学的な観点では自分の死についてのかなりの知識を持っている。しかし、これらの多様な種類の知識は外側の知識の領域に属しており、内側からの知識の獲得には役に立たないのである。これが「百聞は一見にしかず」という一言どうということのない諺の一つの解釈となるだろう。

この結論は少し思いがけないように思われるだろうか？ 確かにそうだろう。もしこの結論がそのように思われるなら、我々はもう一度初めから、ここまで追ってきた話題を再考し、改めなければならない。そのような試みは、知識についての新しい話題を探し求める試みとなるだろう。その中で、死ぬということがどういうものなのかという問題をより適切に理解するために、我々が純粋な知識を獲得できることを私は望んでいる。

死とはどのようなものかを書いた本はたくさんある。それらは残酷な内容である。全ての本が、ぞっとするような細部まで記述してある。息切れのことについては息切れするよ

うな語り口で記述されているし、吐き気のことについては吐き気がするように説明されているし、痛みやひきつけについては苦痛になるほど詳しく描写されている。私の言うことは、若い医者が死んだ患者を開胸して蘇生させようとした試みについての次の文章の例を読めばわかるだろう。

『細動する心臓をつかんだときの感覚は、盛んにうごめくうじ虫が入った濡れたゼリー状の袋を手を持つようだ、と書いてあるのを読みましたが、実際そのとおりです。心臓を握った手ごたえが急速になくなってゆき、心臓が血液に満たされていないのだとわかりました。また、私が心臓の中身を送り出そうとすることも意味のないことなのだとわかりました。なんとといっても肺に酸素がいていなかったからです。けれどそれでも私は諦めずに蘇生を続けました。そして突然、あまりの恐ろしさに呆然とするようなことが起きたのです。それまで完全に魂が抜け出て死んでいた McCarty が、もう一度頭をのけぞらせ、死んだ目を開き、うつろで何も見ていないかのように天井を見つめ、地獄の犬が叫んでいるかのような恐ろしいしわがれた叫び声で遠い天に向かってほえたのです。後になって初めて、私が聞いたのは McCarty の臨終の喉声で、死んだばかりの男の血中酸度が上がったために起こった喉頭の痙攣による音だったのだと気がつきました。それは彼が私にもうやめてほしいと伝えていたのではないかと思います。私が彼を生き返らせようとしたのはただ無駄なだけでした。』

ちょっと詳しくすぎると思わないだろうか。まったくそのとおりで、これらの種の本は波乱万丈の死の物語なのだ。本を開き、シートベルトを締めて第一章を読んで衝撃に備えたら、“ウィーン”、サド伯爵でさえ自己主張訓練が必要に思えるような解剖映像の連続である。

しかし本を読んで死について分かるようになっていだろうか？ それらの本で死が実際にはどんなものか分かるだろうか？ せいぜい、そういう死についてのどぎつい話で分かるのは、周りにいた傍観者や意思や看護師などに死がどのように見えたかぐらいだ。それらの話はイベントや世話をする人の体験として書かれている。その体験の中心にいる人にとって死がどういうものなのかちっとも分かりやしないのである。

死ぬ人間にとって死とはどういう体験なのだろうか？ 他の関係する日々の体験から、貴重な洞察の方法が会得できる。

私は17歳のとき、交通事故にあった。私たち3人が土曜の深夜にハンバーガー屋に行くことにした。家から4ブロック近くきたとき、子供を家に急いで送っていた女性が運転する車が私たちにぶつかった。ある犬と散歩していた人が事件を見ていた。彼が言うには、彼女の車は反対車線で私たちの車に衝突したそうだ。彼女はスピードを出していた。私たちの車は一回転し、ホイールの縁がアスファルトを掘り返すぐらいタイヤが外れた。縁は道をえぐりながら、車は宙にはじけ飛び、電信柱に滑って突っ込んだ。車は柱に巻きつくほどに曲がり、大音響とともに地面に滑り落ちた。女性の車のエンジンは衝突の衝撃ではじき出され、衝突場所から数メートル離れたところに横たわっていた。

私たちの車の中では何が起こったのだろうか？

相手の車が衝突したとき私たちは話していたのだが、私はその話題を覚えていない。私にはヘッドライトがちらりと見えた。衝撃があり、それによって会話はとまった。そして私たちはさかさまになった。転がる時、私は車の天井に落ちることから身を守るために頭上に手をあげた。鼻の中はほこりっぽいにおいがした。大きな爆発がもうひとつあり、あちこちに急にぐいと動かされ落とされたような感じがした。ほこりとガラスがあちこちにとんだ。車が止まると、私は車を運転していた友人に、これじゃハンバーガーはとても食べられないね、と言った。その事故のせいで私は骨盤を骨折した。

見物人にとって、その事故は私が思い出すよりもずっとひどいものようだった。しかし私にとってそれは、誰かが激しいドスンという音を立てると同時にジャガイモの大袋に入って丘を転がり落ちるのにとっても似ていた。もし私が犬の散歩のときにそれを目撃していたら、もっと怖かったことだろう。

レーストラックにいるスポーツ解説者は、群集が落下や衝突を目撃するように述べることはできても運転手や同乗者が体験するようには述べられないのだ。

実際の話、衝突の体験はまったく楽しいものではなかったが、私が後で聞いた目撃者の劇的な話には程遠かった。両方とも「本当の」話であるが、異なる観点から生まれてきたものだったのだ。目撃者の話は私たちの衝突が見物人にとってどのようなものだったかを伝えた。私の話は、中にいた私にとってどのように思えたかを語っていた。

ある夜の夕食会で、私の母の椅子がなんのはっきりした理由もなしに壊れた。私たちは彼女のそばに駆け寄ったが、意識がなかった。彼女はゆっくりと意識を取り戻し何が起こったかをたずねた。私たちから見れば、最後には床に衝突する音で終わる断続的な一連の動きの中彼女は一瞬そこにいて、つぎには意識を失った。それは劇的で恐ろしかった。誰もが衝撃を受け、悲しんだ。

私の母は十分に回復すると会話を思い出し、急に片側へ説明のつかない動きがあり、そして暗闇があったと言った。しかしこのはっきりしない中でさえも、彼女はまるでぐっすり寝ているかのような心地よさと安心感があったことを思い出した。彼女はパニックを起こしている主人や客よりも良い状態だった。

医師が失神した人について述べる時、彼らは暑さの影響や長時間立ちっぱなしだったこと、あるいは心臓の機能不全、体内の水分の動き、脅威やショックに対する心身の反応のことを言う。

失神したことのある人にそれがどんなものだったか聞いてごらんください。そうすると彼らの証言は不思議の国のアリスの1ページ、あるいは私の母の、暗くビロードのような平和な場所の話のように聞こえるだろう。

死ということになると、死ぬことが本当はどんなものか知っている人はほとんどいず、中でもそれを経験したことがない人はそうだとことを覚えておきなさい。非常に年を取った人たちはよく、自分が中年またはもっと若いように感じるという。蘇生した人たち

は一貫して楽しい気分だったという。昏睡状態から回復した人たちはしばしば夢を見ているような、または夢は見ずに眠い状態だったという。死に関する最も悪い噂はどうやら直接体験が最も少ない人たちから来るようだ。それはいつだってそういうものではないか。

Introduction

漫画、アニメ、ハローキティなどのキャラクターグッズのように、カラオケは日本生まれの娯楽の世界的には一般の形式だ。私の意見でカラオケに関して言えば、それは中国からのものであり、それが本当に世界中に広まったのだ。今では世界中のどんな中国人の集団にとっても、カラオケ抜きのパーティはほとんど考えられないものなのかもしれない。

この事実を個人的に痛感したのは1996年、私が日本の電気系の会社で働いていた最後の年のことであった。当時私は日本に滞在しながら、会社の東南アジアとの仕事のネットワークを支援していた。あるとき東南アジアの近隣の国々から来る顧客のために製品のセミナーを開きに、シンガポールにある地区本部を訪れたが、その顧客の90%は中国出身だった。セミナーの締めくくりのイベントはシンガポール湾の辺りの巡遊であった。私たちはクリフォード埠頭で巡遊船に乗り、シャンパン、素晴らしい日の入りの眺め、特別な広東料理、豪華な夜のパノラマを楽しんだ。別の言い方をすれば、私たちはこの手のイベントの普通のプログラムに従った。

船が湾の中ほどに来たとき、大声を上げている人からの声が我々を中に招き、我々はそこがメインの船室が前にビデオの投射システムのための巨大スクリーンが付けられたカラオケルームに作り変えられた所であると気がついた。突然巡遊船では大音響の歌唱パーティが起こった。そこにいる皆は船からの比較できないほどの夜景を楽しむよりも歌うことのほうが好きなようであることに気付いた驚きから私がまだ完全に立ち直っていない間に、唯一の日本からの訪問者として私はほぼすぐに歌うことを期待された。

私にとっての問題は、どうやって曲を選ぶかであった、なぜなら曲の表示がすべてマンダリン語と広東語でなされていたからだ。(両方とも私は理解できない)。すると、ある旋律が頭の中に浮かんだので、それを隣にいる同僚に口ずさんだところ、『「ああ、それは「花心！」だよ』と、曲名を教えてくれて、音楽が流れ始めた。それは、帰納昌吉の『花』で全て広東語の字幕つきだった。私はオリジナルである日本語版を、記憶をたどりながら歌い、音楽が、“泣きなさい、笑いなさい”というサビの部分にさしかかると、聴衆全員が広東語で応えてくれた。

6ヵ月後、私はまたシンガポールでのセミナーに共に参加した仲間といたが、今度は日本のツアーに招待していた。私は、彼らを栃木の工場に招待して、日光の観光もした。夜には、私たちの泊まっていた有名な日本旅館で、みんな浴衣と丹前に着替え、畳の宴会場に集まり、日本伝統のお膳料理を楽しんだ。しかし、ここでも夜をしめるのにカラオケは欠かせなかった。

このセッションの文章は中華系アメリカ人で人類学者の Casey Man Kong Lum さんの本によるものです。それには、世界中の華僑によって楽しまれるカラオケの話があります。

In Search of a Voice

私は初めてカラオケ大会に参加したときに感じたことを鮮明に覚えている。パーティの主催者の一人がリビングルームにカラオケセットを用意していた。間もなく彼はビートルズの歌をみんなの前で歌いだした。私はテレビの映像がちょっとぼかばかしいように感じたがそれよりも主催者の人がビートルズのなんて言う歌かもわからない歌を歌うように言ってくるかもしれないという予感で頭の中はいっぱいだった。

そのカラオケ大会でよく歌っていたのは三人だけだった。主催者たちは歌の途中や歌と歌の合間にワイヤレスマイクを頻繁に渡そうとしたがみんなはまるでマイクに触れるとやけどをしてしまうかのようにマイクから逃げていた。私はみんなに対しても自分自身に対しても恐ろしいマイクから遠ざかるためにあらゆる言い訳を使った。ある時点で「まだ食べたものを消化中だから歌えない」と自分が言っているのに気づいた。最悪のときには「研究の一環としてここで観察しているので自分が歌うわけにはいかない」という、自分でもよくもぬけぬけとそんなことが言えたものだと思う言い訳をしてしまった。

しかし、その晩の途中、カラオケに対する私の反応が徐々にかわっていくのを感じた。笑い者になる恐怖はまだあったが、歌うことへのためらいはそれほどではなくなった。しかしそんな間に、主催者たちは歌ってくれない何人かに無関心になった。始めほど歌うように言わなくなったのだ。私は居づらくなり、少し場違いに感じた。「彼らにうろたえさせられないように」と考えた。

そして私の「瞬間」はついに、ビートルズの「ヘイジュード」の最後の「ラララ、ヘイジュード」というフレーズのときに訪れた。主催者たちがほとんど聞こえないぐらいに低音でセンチメンタルに歌っていたので私も徐々にコーラスに入っていた。「ラララ・・・」主催者たちからは不服そうな反応はなかったし、他の人、特に妻から別段変わった反応もなかったので私はだんだん大きな声で歌い始めた。

その数曲後、私はカラオケソロデビューにドン・マクレーンの「ヴィンセント」といういつも聴いて口ずさんでいる曲を選んだ。私は本当にはその歌を歌えないと気づくのに一分とかからなかった。少々音程が外れていた。そして何度も息がもたなくなった。私は時々歌詞の前を歌おうとしたり、歌詞に遅れて歌ったりした。歌の中盤で、私はこの歌が考えていたよりずっと長いことに気づいた。

家に帰る車の中で、私はずっとパーティに居た人たちがいかに私の歌がひどかったことか気づいたかどうか考えていた。しかし奇跡的に妻は「驚いたことに驚くほど上手に歌った」といった。

「上手に!？」と思った。妻が本気でいっていることが分かっていたので妻の褒め言葉に考え込んでしまった。それにも関わらず、私は歌についてちょっと気分が良くなった。

数日後、私はあの晩感じたたくさんの感情-不安からグループに加わりたいたいという切望、

そして並のパフォーマンスへの積極的な賛同から普通ならうけながすようなほめ言葉を過大であると知っていながら受け入れたこと一について考えずにはいられなかった。また、私は娯楽や一般文化としてのカラオケがアジアの様々な地域の人、アジア以外でのアジア人の地域社会、そして世界中の何百万人もの人々同様に既にあの晩の主催者のところにも何気なく、目につかず来ていたことについて考えた。私はもっとそのことについて知りたくなった。

Karaoke in Three Chinese American Communities

カラオケは、アマチュアが参加して歌うという文化的風習を圧縮して表現している。その風習によって社会的現実が生み出され、保持され、形を変えられる。カラオケが結局どのように利用されるのかやそのような利用の仕方が社会に与える影響は、カラオケを利用するような相互的行動によってだけでなく、カラオケを使う人々の過去の経験や需要、そして期待によって定められ、従ってカラオケの解釈共同体という概念が生まれるのである。

三つの中国系アメリカ人社会に於ける研究で、私はニューヨーク、ニュージャージー州の大都市地域に住む初代中国系アメリカ移民の三つの共同体のカラオケ体験に焦点を当てた。私の分析の中心は、これらの解釈共同体がどのようにして彼らそれぞれの社会的アイデンティティを構築するための集まりの場としてカラオケを利用するのかということにあった。私はフィールドワークで集めた独自のデータに基づいて、三つの共同体について、カラオケの異なった利用や意義を表現する三つの異なったテーマを明らかにした。文化的結合と解釈としてのカラオケ、地位の象徴としてのカラオケ、そして逃げ場としてのカラオケである。

一つ目の解釈共同体は、ほとんど香港とその周辺の中国南部出身の下層中産階級から中産階級の広東人で構成されている。この共同体の成員はマンハッタン区ロウアーイーストサイド地区のニューヨークチャイナタウンにおいて社会的に活発である。彼らの興味は主に広東オペラを歌うことにあるのだがこの人々は、自分たちで広東オペラを歌い、自分たちの民族共同体の年配者へ文化的行いを提供するための代用媒体としてカラオケを使っているのである。

私が調査した二つ目の解釈共同体は大部分が台湾からの移民から成っている。裕福な経歴を歩んできているため、この共同体の成員はニュージャージーでも高級な地区に住む高い教育を受けたプロフェッショナルたちである。彼らはカラオケを地位の象徴と見る解釈の基準枠を身につけている。私はこの裕福な解釈共同体で彼らの富と社会的地位、それからある程度彼ら個人個人の競争心を表現する道具としてどのようにカラオケが人々に使われているのかを検証した。私が調べた三番目の解釈共同体の成員は大部分が中国系のマレーシア人でニューヨーククインズ区にあるフラッシング地区に住んでいる。これらの人々には不法移民が多く、それゆえ闇経済に追いやられている。この共同体の多くの人々にとっ

てカラオケは一時的な逃げ場を提供しているのである。

Karaoke as Escape

Ah Maa は夏に55歳になった。その当時の知り合いのほとんど皆が、彼女のカラオケ誕生パーティに姿を見せた。Ah Maa の友人の大多数は中国系のマレーシア人で、フラッシング地区の近くにある労働者階級地域に住んでいる。Ah Maa と彼女の友人たちは、たいていは社会的、教育的、経済的な地位の低い素性を出た。例えば、非常に幼いときに、Ah Maa は日本が侵略を始めた後、そして第二次世界大戦が終わる前、中国南部の生まれ故郷からマレーシアに両親によって連れてこられた。Ah Maa は実用的なレベルの中国語（そしてほかのどんな言語も）を読み書きする能力を身につける教育を十分に受けることがまったくできなかった。これは彼女が今、「カラオケで歌うときテレビに表示される言葉を読む」ことができないという理由もあって非常に残念に思っている不十分な点だ。

「物静かで素朴な男性」である夫と結婚してからは、Ah Maa は7人の子供たちを育てるため単純な仕事（特別な能力を要さない単純でつまらない仕事、普通賃金も低い。）をすることに生活の大半を費やした。彼女がマレーシアでした最後の長期の仕事はクアラルンプールの町にある日本の会社での清掃婦としての仕事だ。土曜日には、*daaikamje*、伝統的な中国の結婚式で晚餐会が終わるまで花嫁に付き添うために雇われる女性、としてアルバイトをしたものだった。1986年のある日、アメリカから戻ってきた友人と話した後、Ah Maa は夫に、アメリカに楽しみのため旅行に行きたい、と言った。しかし、Ah Maa の頭に実際にあったのは、アメリカに働きに行って、「アメリカドルをいっぱい」稼ぎ、それから「家に戻って晩年を夫と末娘と一緒に暮らす。絶対家を買ってね。」ということだった。（*Loungung* とは広東語で夫を指す口語的表現。）

何人かの彼女のマレーシア人の同期生だけでなく、100年前かそこらの多くのヨーロッパやアジアからのアメリカへの移民と似ていて、Ah Maa はアメリカに定住することを全く意図せず移住労働者としてアメリカへやって来た。Ah Maa と彼女の不特定のカラオケ友達は、認可を受けていない移民である。1990年代初頭、彼女は香港から来た夫婦の家政婦と乳母をしていた。その夫婦は実業家で、ロングアイランド海峡を望む高価な地区に莫大な財産を持っていた。彼らはAh Maa に家の中の小さな部屋を与え、給与の支払いを不法にこっそり行い、保険等は一切出なかった。日中、Ah Maa は一人で家事仕事をし、庭を掃除し、雇い主とその子供たちの食事の用意をし、余分のお金を稼ぐために、庭の端の雇い主の私有棧橋にある、彼らの娯楽のためのボートを洗っていた。そこにはその夫婦のテニスコートもあった。

Ah Maa は1週間のうち6日間ロングアイランドにとどまるより他なかったという事実は、彼女に孤立や孤独と言った絶望的な感覚を与えた。「私はここに捕まっているんだ、ほら。」Ah Maa はインタビュー中しばしば私に言った。まるでその巨大な家が大きな檻以外の何者

でもないかのように。「捕まっている」や「退屈だ」や「孤独だ」という言葉は、私が仕事
中の彼女と話していた 2 年間に渡り、常に彼女の意識の中に存在していた。実際、彼女を
カラオケへと駆り立てたのは孤立や孤独と言った彼女の非常に絶望的な感覚であった。

1992 年の終わり頃、Ah Maa はクラブでの友人のバースデイパーティーで始めてカラオケ
と出会った。Ah Maa は、クラブでは「みんな楽しく歌っている」という事実に魅力を感じ
た。彼女にとっては全く新しい体験だったので、つまり、カラオケは彼女が仕事をしてい
る間にカセットプレイヤーでかけていた「自分が知っている古い歌」とはとても似ていな
い歌（もしくは鼻歌）だったので、彼女はステージに上るのをためらった。彼女は初めに
友人にマイクをもつように提案されたとき、どうしたらよいのか少しわからなかった。Ah
Maa は「私はあなたが歌っているのを聞くのが好きよ」と言って自分に弁解した。しかしな
がら、内心ではクラブにいた他の人たちのように歌えたらなぁと願っていたことを彼女は
私に白状した。

この、友達の誕生日会での Ah Maa にとって初めてのカラオケパーティーが、彼女をカラ
オケに巡り会わせたのだった。6 日間の、島での孤独な滞在の間、彼女に社会的同一性と
主体性を与え続けていたのはこのカラオケ愛好家達との絆だった。マレーシア出身の彼女
の多くの友達と同様、Ah Maa は、それ程歌が上手くなかったにも関わらず歌うのが好きだ
った。彼女は私に一度「私の声は雄のガチョウみたい。」と語った事がある。しかしそれ
も、歌う事は Ah Maa にとって大切に明確な役割があったのだった。

私は生まれてからずっと歌うのが好きでした。働いている時にも歌うのが好きです。特に、
平静さを失っている時に歌うのが好きです。歌詞に集中して、それ以外を心から閉め出し
ます。そうすると落ち着けます。嫌な事は思い出さない様にします。

Ah Maa とその友人の多くにとってカラオケで歌う事は、無機的で戸惑う様な日常生活の、
退屈で決まり切った仕事から気をそらす手段の一つとなっていた。彼女は語る。「私にもな
んでこんな事をしているか分からないわ。そのうち公営住宅に住まなくても済む様に、故
郷に一つ家が欲しい、って事だけは確かだけど。」

Summary Analysis

この解釈できる共同体の人々はだまされる感覚、毎日の反復作業、退屈で決まり切った
仕事、孤独な現実などから逃げる事ができる、束の間の社会的かつ象徴的な安息地とし
てカラオケを作ったのだ。カラオケを歌うことは彼らにとって最高の娯楽なのである。彼
らがカラオケを使うのは歌ったり聞いたりすることを通じて同じような生活の歴史を共有
する人々と交流する一定の社会的な場を作るためであり、これらは共同体の人々、そして
社会的、経済的状态が全く逆である人々でさえも自分自身の声、自信や関係の声を持つ事

が可能な場所なのだ。カラオケの使用は逃げ場や健康に良いメカニズムを求める人々のニーズに応えているし、逃げ場やそのメカニズムはたとえ一時的であったとしても彼らを生きる方法へと導いてくれる。

8-GENDER

-イントロ-

男と女にはいろいろな違いが確かにあるように思われ、もっとも基本的な性差が生理学的、身体的、精神的の違いのなんであるにせよ、性差がはっきりと社会的影響力を持っているように思われます。しかし、これらの影響はとても複雑な形で現れます。あなたが駒場キャンパスを見まわしたとき、東大には男に対して圧倒的に少ない女しかいないことを疑問に思うことはありますか？もしくは、ノーベル賞受賞者が男に対して女が圧倒的に少ない理由を詳しく考えたことはあるでしょうか？

140年ほど前のビクトリア朝のイギリスを生きていた人に男と女のしめる社会的位置の違いについて尋ねれば、ほとんどすべての人はその理由を生まれつきそなわった男と女の先天的違いに求めるでしょう。私たちはこの考え方のもっともはっきりした例をダーウィンの「人間の由来」(1871)に見て取れます。

ダーウィンは男の女に対する身体的な力のみならず、精神的な力での「疑いようもない優位性」に気づき、この違いは生まれつきの違いであり、「生存闘争」と「自然選択」による長い長い進化の過程の中でゆっくりと築きあげられたものだと主張しました。私たちは男が女と比べて、大きかったり、強かったり、勇敢だったり、喧嘩っ早かったり、エネルギーが豊富だったりすることは、原始時代から受け入れられていたことで、そしてその後、主としてほかの男との女性の占有のための争いを通してさらに強化されたものと結論付けてよいだろう。男の知的能力の高さや想像力の豊かさは、もっとも有能な男が自分たちと自分たちの妻や子孫たちを養い守っていくことに成功したことによる、自然選択と受け継がれていった習性がいまいった結果だといえるだろう。(20章)ダーウィンの女と男の違いは生物学的もしくは進化論的に決定されているという理解はヴィクトリア社会に広く受け入れられ、産業革命以降の日常生活の規範的構造を正当化するイデオロギーを支えました。この社会というのは男と女の社会的役割が、男は外で仕事、女は家で家事と育児という風な区分が強くなっていった社会です。

これに対して、フェミニストという言葉もなかった時代のフェミニストであったミルは「女性の隷従」(1869)において、社会的性は社会的に作られるという全く逆の考えを主張しました。

男が女なしの社会で発見されたなら、もしくは女が男のいない社会で発見されたなら、もしくはもし女が男に支配されることのない男と女の社会があったとしたら、生まれつきの男と女の精神的、道徳的違いはもっと肯定的に知られていたことだろう。現在において女の人の生まれつきの特性と呼ばれているものというのは完全に人工的に作られたものであり、いいかえればある方向からの抑圧、不自然な他方からの刺激の結果である。

ここから見てわかる通り、ミルは二つの社会的性差をなにか二つの性の生まれつきの欠かすことのできない決定的特徴の結果というよりは、人工的に作られたものであると主張しています。ミルによれば、はっきりとした違いというのは遺伝的生物学的決定というより

教育や外部的な出来事の結果であるとしています。要するに、ミルはその違いを生まれより育ちと関連付けたということです。

20世紀のフェミニズムにははっきりとダーウィンの生物学的、進化論的決定説を否定し、ミルの社会構築主義を推す傾向がある。たとえば、イギリスのフェミニストの作家のバージニアウルフは彼女の解釈者としての地位を『自分だけの部屋』（1929）で「女性はアテネの奴隷の息子より知的自由を与えられなかった。だから、女性はほんのわずかな詩を書く見込みさえも与えられなかった。それが私が自分の部屋とお金に対して強いストレスを強いられた理由だ。」とのべて明らかにしています。フランスのフェミニストの思想家であるボーヴォワールはこの彼女の批評家としての文章にならって、『第二の性』（1949）で書いています。「女性は女性として生まれるのではなく、女性になるのだ」と構築主義が私たちの性差への理解を発展させてくれると言えるにしても、それらの違いに関するすべての疑問に関して解答できるとはいえません。Psychological review に掲載された論文から抽出されたもので作られた3つの文章で作られた今回のセッションの文章は、これらの違い、またその起源やその性質も、今日において私たちのもっともホットな議題であると主張しています。

-本文-

最初の文章は論文の導入部分からの抜粋です。ここでは著者が彼らの研究の背景の概略について説明し彼らの研究を実行に移したカギとなる疑問について明らかにしています。

Fight-or-flight responseは人のストレスによる原始的な反応であると一般にみなされている。初め、1932年にワーターカノンによって述べられ、生理学的にはFight-or-flight response は生理学的には交感神経系の副腎髄質刺激による、ホルモンカスケードを生成する働きに特徴づけられる。この生理学的現象にくわえてFight-or-flightは人間のストレスに対する対応行動の隠喩であるとされ、人間（もしくは動物の）の交感神経の興奮に反応して逃げるか戦うかはストレス因子に起因するとおもわれている。生命体が脅威の対象や肉食動物を見極めて、その生命体が現実的に肉食動物に打ち勝つ可能性があった場合、攻撃する可能性が高い。敵がもっと手ごわいと判断されるような状況の場合きっと逃走が適切だろう。

調整されつつ行われるストレスへの生物学的な反応は肉食動物からの攻撃、同じ種族のほかのメンバーからの襲撃、火事、地震、竜巻、洪水など恐ろしい出来ごとによる恐ろしい状況などすべての恐怖に対する反応の核となると信じられている。つまり、適切かつ調整されたストレスへの反応は生存の核になるともいえる。自然選択の原則を通して、ストレスに対する反応がうまい生物個体はのちの世代にその反応を受けつぐだろう。それにより、Fight-or-flight responseは進化の結果生じた反応であると考えられる。

Fight-or-flight responseであまり知られていないことだがそのパラメーターを調査する実験は男、特にオスのネズミに対して行われた。最近まで性別における研究の分布の偏りもそうだった。どうして、ストレスの研究は男のデータばかりに重きを置くのか？この偏

見にたいするいいわけは最近まで女性の医学的薬の実験や、慢性的病気の治療法の研究や、病気に対する免疫の弱さの研究の理論的根拠と似ている。理論的根拠とは女の人は交感神経反応のサイクルは（生理の関係で）ものすごくたくさん種類がありすぎて、その実験のデータが混とんとした、そしてたいい解釈不可能な結果になってしまうからだ。

Fight-or-flight response もきっと女性特有のサイクルの影響を受けるだろう。そして、結果として女性のFight-or-flight responseのことを考察する根拠は一貫性のないものになってしまう。しかし、相反する複数の可能性のため解釈が難しい女性の性質のデータがただ単に交感神経系の反応の種類のみによるだけでなく、女性のストレスへの反応がもっぱらFight-or-flight というわけではなく、その反応においてFight-or-flight という風な反応が有力な候補でさえないからだとしたらどうだろうか？この論文の最後の章で、著者は彼らの主張を要約し、彼らの研究の限界を認めたとうえで、彼らの結論とのかかわりについて議論している。2番目の引用はこの章のはじめからである。

私たちは初めにうまいストレスへの反応は自然選択の原則を通して後続の世代に受け継がれていくと提案した。うまい脅威への対応を持たないものは生殖が可能な年齢まで生き残れる可能性が極端に低い。追加の推定は主として女性は若い子孫たちを育てることに重要な役割を担うので、後世に首尾よく受け継がれていく脅威への反応というのは自分と同じように子孫も守れるものだろう。種の中で女性というのは、初めは妊娠時から保育に多くの時間を割き、そして主として子孫を成熟させてやる上で中心的役割を担う。母としての時間を割く量の多さは、女性のストレスへの反応が自分と自分の子孫の健康を危険にさらさないようなもので、かつ彼らが生き残る可能性を上げるものになることにつながる。

Tending, すなわち静まり、子孫をケアして、環境に溶け込むことは多種多様な脅威に対応するのに効果的である。対して、女性の一部の戦うという反応は彼女ら自身と彼女らの子孫を危険にさらすことになる、女性の一部の逃げるという行動は妊婦や、成熟していない子孫をケアする必要性から失われていくだろう。そんなこんなで、この二つに代わる

（Fight-or-flight ではない）反応が女性のなかで発展していった可能性が高い。

たくさんの脅威的状况において自分と子孫を守ることは難しく、そして複雑な義務だ。そして、効果的社会的集団の利用するものはそれをしないものに比べて多くの脅威にうまく対応できる。この仮説は女性が脅威から自分と自分の子孫が、複数いる群れの仲間にももってもらえる確率を最大にするように、ストレスへの反応において選択的に連携するという予想につながる。それに応じて、私たちは、女性の子孫を世話して社会的集団と連携するというストレスへの反応は、ストレスのかかる状況の女性や子孫を援助してくれるものや保護を与えてくれる連合のネットワークを形成するbefriendingの過程により容易になると主張する。私たちはtend-and-befriend pattern（子供を世話して、社会的集団と連携する）の根底にある生理学的メカニズムはattachmentcaregivingssystem、すなわちその母親の絆と子供の成長の役割のため主として以前に調査されてきたストレス関係のシステムであると提案する。ある観点からいえば、女性のストレスのかかる状況にtendingの反応は、子孫

たちの基本的生物学的調整システムの発達にとっても重要だと思われる幼児への愛情のシステムに相当するものとしてあらわれるようだ。おおくの調査は母の幼児への愛着と幼児の感情的、社会的、生物学的発達については調べているが、母親のtendingを引き起こさせる母親のメカニズムに相当する者の研究をしている学問は少ない。私たちはこのバランスを正そうと試みた。加えて、仲間を助ける傾向はきっと attachment-caregiving systemに便乗して、したがって、最低でもtendingを規制する同じ生物行動学的システムに部分的にでも調整されるだろう。この分析から交感神経系がfight-or-flight responseに生理学的基盤を提供するのと同じように神経分泌系のメカニズムがこれらのストレスへの反応を調整するようだ。

未来の研究とのかかわりの議論でこの論文を結論付ける前に、著者は彼らの研究についての彼らの社会的、政治的見解について説明しています。

この問題は性による人間の行動の違いが社会的規範で理解されるべきあるのか、それとも生理学的反応で起こったと理解されるべきなのかの問題としておこる。たとえば、人間の行動にはかなりの柔軟性があることを考えると母の子孫への時間を割く量は父のものより多くあり続けるのか、否かという疑問が生じる者もいるだろう。返答としては現代の男と女の親としての時間の割き方の差はストレスへの反応が進化してきた頃の違いに比べると重要ではないことに言及する。進化論的生物行動学的主張は現代の人間の行動を規定するものでなければ、かといって、現在人間の行動が柔軟性を持っていることが必ずしもそれに対する反論になるわけでもない。私たちは人間の社会的役割は文化によって相当異なるし、tend-and-befriend patternに似た行動パターンをとることを規範として女性に課しているような社会が存在することもあり得るが社会規範だけでそれを説明できる可能性は低い。社会規範のポジションは私たちが定めた種の相似性について述べることでなければ、基本的な私たちのポジションのための生物学的証拠を説明することでもない。それにもかかわらず、未来の研究は環境の情報の影響を受けやすい私たちの生物学的行動学的モデルの役割を詳しく研究することが重要である。

性による行動の差を生物学的基盤があるものだとする分析はさらに重大な政治的不安を引き起こす。たくさんの女性は、ある程度もつともなことであるが、そのようなモデルは差別や社会的抑圧の手本に使われるかもしれないと感じる。そのような徒労が起こらないように、私たちは私たちの分析は女性を支配する社会的規範について特定の規範を前提にしてはいないとはっきりさせておこう。私たちの分析がこのメカニズムの理由から女性は母親、いい母親、男親よりいい親じゃなければならないといけないと言っているものであると解釈されるべきではない。同様に、この分析が女性というのは当然男より社会的であり、不適切な社会の基本的骨組を形づくり保ってはいけないという責任を負わされる証拠として解釈されるべきでもない。

しかし、ほかの政治的心配としてはきっと生物学的基盤が何を意味しているかを誤った前提に基づいているものだ。生物学的人間行動の分析は時に社会学者によって柔軟性のな

く不可避免的に人間の行動のことを述べているとか、人間の行動が均質的であるとする還元主義的な試みと勘違いされる。そのような理解によりいわれのない行動の生物学的基盤に関する心配を構成する。生物学というのは運命のような一つの中心的傾向ではなく、社会的、文化的、認知的、感情的認識に影響し、影響しあい実質的な人間の行動の柔軟性の結果になる一つの中心的傾向であるのだ。ここ十年の生物学的研究は、遺伝子の発現からストレスの多い状況への急性反応までの幅広い研究でも、生物学が行動に影響を与えるのとちょうど同じよう行動が生物学に影響を与えることを示している。社会規範や生物学を人間の行動の説明と見るよりもっと生産的で理論的で裏打ちされた戦略としてはどのように生物学や社会規範複雑にからみついて人間の行動の柔軟性の説明になるかに気付くことだろう。 _

9 Coffee

Introduction

コーヒーの原産地であるエチオピアでは、人々が、殻がとってあって、乾いたコーヒーの豆を噛んで、深い平なべで挽いて、牛乳とバターで煮るというコーヒーの儀式がある。コーヒーの準備ができると、儀式に参加している料理と人々は祝福をうけ、数粒のコーヒー豆が地面へとまかれると同時に祈りをささげる人は「この世に平和が続きますように、人々が健康でいられますように」という。

この儀式の名前は、「虐殺されたコーヒー(slaughtered coffee)」と訳されるだろう。(might の訳がわからんちん)。虐殺しているコーヒーという考えは、野蛮に聞こえるかもしれないが、この儀式は深い意味がある。我々は人々が他の生き物を殺さずに生きることができないということを覚えていなければならない。「殺生」が牛を虐殺することであれ、ジュースのためにブドウを搾ることであれ米や小麦のような穀物をまくために地球を掘ることであれ、人間の飲食はいつも殺生によるものである。このエチオピアの虐殺の儀式はコーヒーでさえ人々が虐殺しなければならないことに気づいていることを示している。それは地球への感謝の気持ちを表す必要性をもまた示している。

コーヒーを入れて飲むことの実践は人間の文化の歴史に長々と編みこまれている。アラブのことばの kahwa (coffee) のひとつの解釈として、その語は、「謙遜(modesty)」を意味する語に由来するのではないかというのがある。コーヒーを飲むということは、意味のない暴飲暴食と同様に虚栄心や不必要な社会化を反映した宗教的集団で元来発展してきた。イスラム世界中へととても早く広まったコーヒーを飲むやり方は、さまざまな世界的動向と関係していた。16 世紀には世界市場における革命が起こったときに、もともと東洋世界とよく貿易をしていたアラビアの商人は、自分たちが重大な危機に瀕していることに気がついた。しかし突然、まさにその瞬間に、新しいコーヒーの商品がアッラーから授けられた贈り物のように現れた。カイロの大商人はすぐにこの新しいものをつくり、販売して自分たちが力を取り戻せるような方法を理解した。しかし最初のうちは、コーヒーの広まった消費を助長するために彼らはその社会的地位を上げる必要があった。彼らのアプローチは大都市のもっとも繁栄している区域に豪華な「コーヒーハウス」を設立することだった。

イスラム世界における、この方法に基づくカフェは近代西洋諸国において大きな役割をはたしている、というのもそれはコーヒーハウスという概念だけでなくイスラム世界のコーヒー豆も輸入するからだ。しかし、コーヒーが世界的なものになるにつれて、コーヒーといまだにエチオピアのコーヒー虐殺儀式においてあがめられるその起源との関係はだんだんと弱まっている。今日コーヒーが消費されている国々に住む、販売者と消費者は主に価格と品質に興味がある。彼らは、自分たちの前にあるテーブルの上のコーヒーが、地球から、人々から、地球の他の場所の水から実際にその命が手に入れられたものであり、どこからともなく現れたものではないということに気づいていない。

最初に現れたときからずっと、コーヒーは人類と自然との変わり続ける関係に光を当て続けている。今日、いったいどんなことを我々は尋ねているだろうか？地球温暖化はコーヒーを挽くのといったいどう関係しているのか？コーヒー豆を綺麗にする過程は、土壌や水の汚染にどう寄与するのか？コーヒー畑が広がるのと森林破壊はどう関係しているのだろうか？

コーヒーは単なる飲み物ではない。コーヒーハウスは単なる建物ではない。コーヒーとコーヒーハウスは糸のようなもので、歴史から社会学、心理学から人間の言語行動、ビジネスとしての(?)医学から環境の研究や環境破壊の研究までにわたる全ての学問分野をに網をはっている。もしあなたが自分の目にあなたの次の1杯のコーヒーからあがる快くカールした何本もの幹を追うのを許せば、あなたは人間社会を形作る新たな相互に影響する力の新たな配列を見始めるだろう。

Coffee and Globalization

あなたはプラハで“カフェ”というカフェやロンドンで“ヴィクトリア”という喫茶を見かけても特に何ともおもわないでしょう。しかし、ハンス・ディートリヒ・ゲンシャーが元ドイツ連邦共和国の外務大臣だったことを考えると、ザグレグに“カフェ・ゲンシャー”があることに驚くだろう。しかし、実はクロアチアには相当数のカフェゲンシャーが存在し、それには納得のいく理由がある。ユーゴスラビアが1990年代に民族紛争に巻き込まれたとき、世界中が反対していたにもかかわらず、ゲンシャーはクロアチアを独立へと導くことに成功した。カフェは感謝の意を示すおもしろいショーである。クロアチアを訪れたとき、私はこういったカフェでコーヒーを飲む事もあった。

私はクロアチアの専門家ではなく、クロアチアについてあらかじめ知っていたことと言えば、そこはネクタイが発明された国であり、2000年のサッカーワールドカップで日本と対戦した国であるということだ。戦争の傷が残る国だというイメージを持っていたことを別にすれば、そのときはこれくらいしか私がクロアチアについて語れることはなかった。しかし、一度ザグレブとタルマツィア海岸沿いの古都であるドゥブロヴニクを訪れた後は、私が思ってきた国のイメージはなんと不適當だったのか気づいた。確かに見える形で戦争の傷は残っていたが、とても安全で訪れる価値があるように思われた。海岸要塞の都であるドゥブロヴニクは古代ギリシャの時代からアドリア海を見下ろす位置に建っている。それは平静と平和な雰囲気によって威厳のある都市であった。そしてもちろん、そこにもコーヒー屋はあった。要塞のバイルゲートの右隣に、私は良いコーヒー屋を見つけた。今回は、カフェゲンシャーではなく、インターネットカフェであった。

ドゥブロヴニクのインターネットカフェは、その町全体と同じように気前よく世界に開けていた。どのコンピュータの前に座ってもすぐにウィンドウズのシステムによって世界

の情報があふれる仮想世界へ導かれる。同時に、カフェの窓はアドリア海の水に向けて開いていて、その海の向こうには東の地中海やアフリカ、そしてアメリカがある。そう、そのとき世界の注目はニューヨークに向けられていた。ハンガリー製コンピュータで埋め尽くされたインターネットカフェの一角にはドイツ製のTVがニューヨークのワールドトレードセンターの映像を映していた。その日、世界はさらに小さくなったように感じた。そして、クロアチアはただの国際通信ネットワークのもう一つの部分に思われた。実際に、そのときクロアチア国営電話会社がドイツテレコム社に買収されそうになっていた。

今は世界化の時代だ。でも地方的なことがもはや重要でないというわけではない。人間はまだとても地方的に存在している。

だからおそらく本当は、人々が言うように今はグローバリゼーションの時代なのではなくグローカリゼーション、すなわち世界的、地域的という両極の状態が同時に至る所で共にしっかりと混ざり合った時代なのだ。世界経済がどのようになろうとも、地域的なレベルでは経済はあらゆる所で低迷している。多国籍企業だけが見事なまでに国際的なやり方で急速に力をつけ続ける。それに比べて、国民国家には本質的に地域的な存在しかない。国民国家の基盤は人民と税である。しかし多国籍企業は国民国家とは違う空間に存在していて、安い労働力と低い税を探し出すために事業の中枢を世界中自由に動かすのだ。石油に次いで2番目に世界で取引されている世界的な必需品であるコーヒーが世界化の本質を極めてよく実証している。ハンス・ディートリヒ・ゲンシャーの話に戻って、ドイツのコーヒーを例にとってみよう。ドイツのスーパーで売っているコーヒーが500グラムで4ユーロするというのを考えてほしい。それは約500円だ。その4ユーロのうち、たった約0.8ユーロ（100円）がコーヒーの栽培者にわたる。それに対して、1.2ユーロ（150円）がドイツ政府にわたることになる。コーヒーを生産している国のほうがそれを消費している国よりもお金を少ししか得られないのはおかしいのだが、これが世界市場が動く仕組みである。1995年、ドイツ政府はコーヒーの関税で11億5000万ユーロ相当を得た。2003年、ドイツ政府が発展途上国援助に当てた予算は35億であった。言い換えれば、ドイツ政府がコーヒーから得ている収益は同政府が海外援助にあてている予算の約3分の1に等しい。ドイツが発展途上国を援助する理由としてあげているのは「貧困を根絶すること」で、中央アメリカや南部アメリカのコーヒー栽培者の中には確かにひどく貧困に苦しめられている人もいる。しかし、ここで問題となっているのは、海外からの発展援助が直接コーヒー栽培者のためにはなっていないということである。

19世紀中ごろの間、ドイツは中央アメリカ、特にグアテマラとコスタリカの高地にコーヒー農場を作ろうと大変努力をした。それらの国々の高地に作られた巨大なプランテーションは土着の文化と言語に壊滅的な打撃を与えた。

そして、19世紀後期に、大成功をおさめたドイツのコーヒー農園主がメキシコへと標的を移した。このように国境を越えることは世界化へのまさに最初の一步である。今日、メ

キシコはコーヒー生産で世界第 4 位に位置づけており、また、グアテマラやメキシコを含む地域でナウマンコーヒー団体が結成された。ナウマンコーヒー団体は今日ハンブルグの本社から、世界のコーヒー取引の 10 パーセントを支配している。

ナウマン社とドイツは印象的な組み合わせである。世界的に見てドイツはコーヒー輸入量においてアメリカについて第 2 位である。そして、(コーヒー豆の)生産地でいられた豆には高い関税がかけられるのでドイツのコーヒー輸入の圧倒的大多数は生の豆である。ハンブルグに拠点を持つナウマン団体がこれらの豆がドイツに届けられてからいることを担当する。一包みのコーヒーに 4 ユーロかかるという先ほどの例に立ち戻ってみると、4 ユーロの半分以上(2.2 ユーロ)が貿易業者、輸送業者、豆をいる業者に(これらの人々はすべてナウマン団体に属するが)行くということがわかる。つまり、これは国と会社との間のすばらしいコラボレーションなのである。そのうえ、さらにいっそう逆説的なことにドイツはコーヒー豆を作ることができないのにこの課程の結果、いたコーヒー豆の世界でもっとも大きな輸出国の 1 つになのである。世界規模の市場は確実に不可思議な地理的状況を生み出す要因となっている。

我々はザグレブの“カフェ Genscher”で、有名なドイツ人と、いっぱいコーヒーとともに開始した。我々は、さらに有名なドイツ人と予言とともに、メキシコで結した。かつてカールマルクスは、その進んだ機械と高い技術力で世界市場を支配するような資本は、土壤と肉体労働の尊厳の価値を下げるだろうといった。この予言はいくらかの真実を含んでいただろう。というのは、たとえどんなに多くメキシコにジャーマニアやシュワルツワルドといったドイツの名前が、それらとともに豊かな自然の移植されたイメージをともなっていようと、これらのコーヒー農園が、人類が土壤とともに仲良く働いていけるような土地とは、いかなる風にも理解されないであろうからだ。かつて有能な人間の手によりなされたものは今となってはどんどん進んだ機械によって引き継がれている。地方の人々は機械のできないようなたぐいの仕事しか今となってはしない。アジア通貨危機の一年前の 1994 年にはペソの危機がメキシコを襲った。メキシコのコーヒー農場の主は、暴動を起こした。ヨーロッパに本部があり、税金の安いガテマラに登録してあるような、地方の支配的な多国的ビジネスは、ポストモダンでポスト産業主義の未来の世界に存在するようだが、それらのメキシコの労働者たちは、まるで前近代的で、全産業主義の粗暴な労働の世界で身動きがとれなくなっているかのように扱われている。この意味で、我々が世界化を 1 杯のコーヒーの生産により展開されたものとして見るとき、我々は世界化の一例というよりむしろ植民地主義とぼすと植民地主義、前近代と近代が恐ろしくひとつに混ぜ合わされてようなやり方で、世界の人と地方の人と一緒に崩壊させていくようなグロテスク化になっていくのを見るだろう。

いんとう

どれだけポリネシアの国をいえますか？多分、ポリネシアといったら、サモアとかトンガとか、フィジーとかいう名前がおもいつくと思う。でも、世界地図で場所を示せる？

ポリネシアは、だいたい太平洋の三角形のエリアです。ハワイ諸島が一番上。それでニュージーランドが西の下でイースター諸島が東の下。ポリネシアは多分地球上で一番最近になって人が住み始めた場所。メラネシアからの人たちがだいたい 3000 年か 4000 年前になってようやく渡ってきた。その人たちがもともとは、だいたいその 50000 年前にアジアからメラネシアに移ったことを考えれば、ポリネシアに渡るまですごい時間がかかったということが分かる。多分、航海の技術が発達したからポリネシアに渡ることができた。メラネシアに移るときは、海面が今よりもずっと低くて、メラネシアで島から島へ移動するのは別にたいしたことではなかった。でもポリネシアは、すごく遠くて裸眼では見えなかった。

学者たちは、航海というのはたいてい、行ったり来たりするものだと考えている。海の民が新しい島を見つけると、その島と自分たちの住む島を行ったり来たりして、その新しい島を拠点にする。海の民はいつも広い海の方を見ていた。海の民は海のおかげで 1000 ものほかの島に行くことができた。そのおかげで、ポリネシアの島は独自の文化を持つだけでなく、たくさんほかの島と共通するものを持っている。

ヨーロッパの人にとって一番なじみのある世界地図というのは、真ん中に経度 0 度の線があって、ロンドンのグリニッジをとおっていて、だから、ポリネシアがあるオセアニアは地図の一番右と左に真っ二つになっている。昔のヨーロッパに地図には、すごく遠いところのように見えるオセアニアのところにモンスターや大きな滝が書いてあって、未開だということであらわしていた。世界は平らではなくて丸いということが分かった後でも、この地域はヨーロッパの人にとって、地球の反対の場所であり、だから、地理学的につじつまを合わせるために必要だった日付変更線をおけた。

ヨーロッパの人が最初は海路や資源を探すために、後には、最近独立したアメリカのかわりに、定住したり搾取したりするところを探しにこの地域に来た。ヨーロッパの開拓者たちにとって、ポリネシアは、まだ使わずに残っている資源、あるいは、人跡未踏の憧れの楽園、あほな野蛮人の住むところ、それか、そのみっつ全部だった。でも一つ分かっていることがあった。それは、自分たちのような文明化された国からの使者がその地に訪れれば、それは、自分たちにとって利益になるということ。そしてかの地にいる、自分たちを待っている人たちにとっても。

しかし、ポリネシアの人にとって、地球の反対側からわざわざ人が来るなんてことは、全然望んでいたことではなかった。それに、ポリネシアにヨーロッパの人が増えるにつれて、英語を話す人が入植した地域の社会は、白人や英語が優勢になった。土着の人たちの生活

様式はこれまでに例を見ないほどかわり、時には入植者の文化や言語を使うよう強制された。その結果、英語が母国語だという世代も出てきた。だから、現代のポリネシア人の自らの像というのは複雑なもので、特に英語でそれを説明するときは余計に複雑である。

英語で書かれたポリネシアの詩というのは、その地域の土着の言語で書かれたものとは明らかに一線を画する。昔のポリネシア文学は、文字で書かれることはなく、口承されていた。それは、儀式において詠唱されていたり、思ったことをいうというものだったり、あるいは、部族の神話、歴史、家系のような大事な知識を残すための歴史の記録としての役割もした。英語の詩の中には昔からの生活様式や文化といったものを取り入れようとしたものもあるし、近代的な都会での生活を謡ったものもある。まあ、どちらも今のポリネシアの生活には必須のものだ。

ロバートサリバンの詩、ホンダワカは、この二つの水準を縫る。サリバンは若いマオリの詩人。ポリネシアの詩の寄せ集めの編者の一人であり、その序章が今回の10章のメインテキストとなっている。ワカというのは、おおきなカウリマツをくりぬいて作った船で、50人くらい人が乗れる。マオリには、マオリの先祖は伝説の母国、ハワイキから、7つのワカに乗りニュージーランドへ渡ったという言い伝えがある。そして、今のマオリの人はみな、その先祖の誰か一人にまで系譜を辿れるという。だからワカは、マオリ個人の源流や家族の歴史に関係するだけではなく、海の民としてのマオリのアイデンティティーをもあらわしている。

日本の車とワカを併存させるのは一見不釣り合い。日本車は現代のニュージーランドの景色になじんでしまっているが、それはニュージーランド固有の文化とは無関係。それに、サリバンは、自身のホンダの車をワカと呼ぶ。その古い車は、サリバンの、人生において重要だったいろんな体験を全部みていた。父の死、息子の誕生、図書館員としての経歴、そしてなによりも、詩の創造。ホンダワカの詩はすぐにマオリの伝統、そして、詩人の伝統の中に組み入れられた。

ヨーロッパの人がポリネシアに住み始めてから200年以上が経ち、ポリネシアの地の固有のものと外部からのものとが複雑に絡み合ったものを紐解くことは難しい。それに、ポリネシアのひと自身もヨーロッパによって押し付けられた固定観念を利用することもしばしば。個人によって発せられた声によってのみ、隠された真実に達することができるのではないか。

ホンダワカ

きょう30ドルと引きかえに、
ペンローズの解体業者に
ホンダ・シティを引き渡した。

それは7年前6000ドルで買ったもの。
窓の下にさびがついて、
サイドウィンドーの周りにも。
車検のときに、こう書かれた。
「この車にはたくさんの錆があります。」

その車に乗って、ブラフヘパットおじさんの葬儀に行った。
途中モエラキで少しとまって、
空を見た。夢のような空。

ある日友達がその車に乗って私たちについてきた。
テムエラが生まれるから、国立産婦人科病院まで。
(私たちは彼女のおおきなシトロエンに乗っていた。)

ホンダに乗って、家族に会いに、
オタキにも行った。ウェリントンにも。

ホンダに乗って図書館学校にも行った。
ヴィクトリア大学のとなりだった。

夜、家族の再会のパーティが終わってから、
ホンダに乗って、おじいちゃんを乗せて、小川を渡った。

テムエラが初めて乗ったのはホンダ。
ホンダはとても重要なものだった。

私の詩において。
そして、私はもうホンダを捨てた。

星の海

ポリネシア。それはまさに多様なイメージをもつところ。たくさんのイメージを呼び覚ます。あつたかい南国の海、やしの生えた浜辺、草でできた小屋、半裸の浅黒い少女、キャプテンクックやウィリアムブライ、そしてケビンコスナーやエルビスプレスリー。ポリネシアとして知られる地域は実際すごく美しいところが、同時に、何世紀もの間並大抵でない困難になんとか打ち勝ってきた多くの人たちの故郷でもある。外部の人が太平洋にロマンチックな考えやイメージを持つから、彼らが来てからずっと私たちは苦しめられてきた。だからポリネシアの物書きや芸術家、学者や政治家にとって、ずっと、休暇や休養のイメージを打ち壊すことが課題だった。

ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアというのは、太平洋の文化地域である。メラネシアやミクロネシアの人が太平洋に住み始めたのはだいたい 50000 年前。私たちポリネシアの祖先は、3000 年とか 4000 年前になってすみ始めた。そして彼らは、海をテモアナヌイアキワと呼んだ。三つの地域の名前や境界は、200 年前になって決められたもの。私たちも決定に加わったが、ほとんどは外の人が決めた。でも違いはあまりなく、外の人にとって、例えばトンガの人とサモアの人、ニウエの人とマオリの人を区別するのは多分難しかった。でも私たちは、文化間の違いを尊重し、そういったものに喜んで注意を引く。

ポリネシア人が始めてこの地域に来た時、多分、太平洋の境界線についてあまり知らなかったと思う。彼らはその知識を、広い海に広がった島々を探検したり、そこに移り住んだりする過程で習得した。昔のポリネシア人にとって、空も海も、境界がなく無限に広がったものだったに違いない。というのも、人がどのように生活して互いに関係しあうかは、この二つをどれだけよく理解しコントロールできるかにかかっているのだから。この途方もなく広い空と海は、ポリネシアの人の知る世界であったし、これからもそうであろう。私たちの世界観は独特で、世界は高く広く深く、大陸やおおきな島から来る人たちとは違って、世界にはほとんど制限がないように思う。ポリネシアの人は、細部にまで気を配って自らの血統を記録し、地球と、空と、神と、そしてお互いとの絆をつくり、強める。ポリネシア人はまた、死んだら星になって広い太平洋に住む人々を導く。人々は世界の読み方、対処の仕方を学び、つまり海流、風、星の読み方を学び、その知識をもちいて生を営む。だから、海、空、星のイメージを組み入れて、このアンソロジーを星の海と名づけた。このタイトルは同時に、アンソロジーにはたくさんの詩人や詩があり、その起源は太平洋や、たくさんの文化にあるということをも意味する。

ポリネシアは、ハワイ（北東）から横にいったらラパヌイ（イースター諸島）、そして下はアオテアロアやニュージーランドが南西にある。その三角形の中には、トンガ、サモア、クック諸島、ニウエ、トケラウ、ソシエテ諸島がある。また、メラネシアにはロツマのような、ポリネシアの飛び地がある。こうした国々は、火山諸島から環礁まで、雪を抱く山から青い砂浜まで、とても多様である。このアンソロジーは英語を話す国の詩に限定した。それは、歴史の事件のせいでフランス語のポリネシアの作品が締め出されたからだ。

ここ 200 年間、まずヨーロッパ、次にアメリカやアジアの植民地化の影響で、私たちの文化は急に変わった。宗教、食事、輸送手段、家、意思疎通、生活のあらゆる面が植民地化の影響を受けた。同様に、私たちの多くが、いまやヨーロッパやアジアなど、他の血をひく。太平洋の民は、メラネシアやミクロネシアも含め、いつもほかの島の人と結婚してきたのだ。

1950 年代、脱植民地化運動がおこり、たくさんの国は独立をとりもどしたが、アオテアロアやハワイ、ソシエテ諸島などは植民地のまま残った。こうした国に住むポリネシア人は、政治的独立をしようとする少数派であり、自らの文化を守り、発展させようところに決めている。文学や芸術は、脱植民地化プロセスの一環であり、植民地の影響を受けてできた新しい文化を、自由で独立した国だとするの役に立つ。

ポリネシアは、外部の人の著作によって生み出され、その著作は、私たちの地域に関してたくさんの神話を生み出した。1950 年くらいから、ポリネシア人も本を書き始め、自身の世界観をしめし、私たち自身と場所を中心にすえた。こうした変化はすべて、私たちが選んだ詩のなかに顕著であり、世界観の相互にかかわるようすを示す。ポリネシア人の活気にあふれいくつもの言語を話す多様性には共通点があり、それは、海、語彙、社会的文化、価値観、植民地の歴史である。こうしたものが力となって私たちの詩を一つに纏めあげる。

私たちの地域にはたくさんの西洋の神話があり、それは、ミードによる性的魅力から、うその旅行者取引や、キャプテンクック伝説まで。このアンソロジーによって、西洋の目が、現在過去の神話から、ここにふくまれた、詩人たちによって表現された真実に移ることを望む。

詩が好きでポリネシア人として、ここ 20 年で私たちの地域に生まれ出た詩を見たい。そしてその詩を通して、私たち、私たちの文化に何が起こったか、何が起きているかを見たい。詩というのは私たちにとって一番ふりかたき芸術の形式であり、いまだに敬意を持たれ、愛されている。この古い詩の伝統がどのように新しい詩にあらわれているの。このことを検証できる詩の収集をしたかった。

しかし、なぜ英語で書かれた詩だけに注目するのか。40 超の固有の言語、それに英語フランス語ポルトガル語スペイン語日本語などなどこのポリネシアにはある。単に、この全部の言語をアンソロジー化することができなかった。英語は 200 年以上この地域にあるし、現在も一番ありふれた意思疎通手段である。英語は太平洋の言語になった。実際ポリネシアにはいろいろな英語があり、それぞれのポリネシアの国で英語を土着化しかつてにつかっている。だから、マオリ英語もあるし、サモア英語、ハワイ英語などがある。ピジン語もたくさんでてきて、ハワイのクレオール英語などがある。植民地化した人の言語はポリネシアの語彙や概念が導入され、よりゆたかに復活してきたし、そうし続けている。

このアンソロジーのなかみは、そうした英語やピジン語の多様性を表している。詩人の大半は二ヶ国語を話すか、詩を書くのはおもに英語。のこりのひとは土着語を話せず、だか

ら英語だけで書く。この星の海では、国別でなくて名前アルファベット順で人を並べた。私たちの目的は、太平洋の詩を並列に並べることで共通なところもあるが変わったところもある文化の見方をつくりだし、年齢、言語、場所、政治形態、性などのようなたくさん色をみせるプリズムをとおしてポリネシアの詩をながめること。20年後にもポリネシアの詩は予想できない方向へ発展しつづけているとおもう。私たちの歴史が発展してきたように。このアンソロジーが今日のポリネシアの詩を正しく映していること、将来の基準点となること、あらゆる教育段階の人にとって有益な教育材料になることを切に願う。

帰郷

彼はまだ子供だった。
あなたの一番上の子。
奴隷として
盗まれた。
運ばれた。
オーストラリア。
あなたは泣いた。
親に小言を言われすまなく思って。
ひとをやった。
彼をさがしに。
でもどこを探せばいいの？
赤い大きな国の。
150年たって、彼は帰ってきた。
青い目をして金の髪の毛。
彼はがけに座った。
そこはあなたがよく座っていたところ。
彼が戻るのをずっと待って。
貿易風は、
あなたの歓迎の抱擁。
シギは歌う。
歓迎の歌を。
そして彼らは飛び去った。

ポンゾンビーをこえて

きのう夜明けのほんの少し前、庭がすごく寒かったけど、黒い星がポンゾンビーの上空に、うちの家の真上に止まったんだ。第三種接近遭遇みたいな感じだった。だから窓を開けたんだ。サムは言った。それで、宇宙旅行、終わりのない海、それと神の、明るくて深い、改心させられるような匂いを吸い込んだ。でも神とか信じないんじゃないかった？私は言った。いまはもう信じるよ。彼は笑った。

Session11 VIEW

Introduction

ある一つの物体を異なる角度から見たらどうなるでしょうか？コーヒーカップのような何の変哲もないものを使って試してみましょう。どう持とうが、どう首をかしげてみようと、それは同じコーヒーカップに見えますよね。ある角度からみたらコーヒーカップに見え、また別の角度から見たらリングや鉛筆に見えたなんてことがあったらとても奇妙でしょう。コーヒーカップはあなたがどう視点を変えようと、遠くから、又はすぐ近くから見ようと、同じコーヒーカップなのです。このような経験から、物体は、私達がそれをどう見るかに関係なく一定不変のものである、とたやすく推測できます。しかし実際は、そんなに単純ではないのです。

ある時期日本では、若い女性の間で10cm以上の厚底の靴やサンダルを履くのが流行っていました。これは間違いなく、かえって不安定な靴であり、かなりの若い女性達がつまづいたり、さらには転んだりしたのは疑いありません。しかしそれにも拘らず、女性たちはそのような流行の先端をいく厚底靴を履く事ができて幸せなものでした。私が思うに、彼女たちはただ単に異なるスタイルを求めていただけではなく、周りの景色も違ったものに変えたいと思っていたのです。厚底靴を履くということで、そうした変化がもたらされました。同じように、あなたは通りの真ん中でしゃがみ込む人をよく見たものでしょう。未だにやっている人もいます。多分、あなたもやってみるべきなのです。

おそらく、見るものがやや異なって、少し変わって見えるでしょう。体を傾けたり地面にねそべったりすれば、周りの景色や物体がさらに変化することでしょう。いったい何が変わったのでしょうか？少し前コーヒーカップの例で学んだように、物体の意味は変わっているにはみえません。やっぱり人は人、コーヒーカップはコーヒーカップ、木は木に見えます。しかし確かに何かが変わっているのです。

物は、私達とそれとの関係が変わると、意味を変えます。コーヒーカップは、それにコーヒーを注ぎ入れ、そこからコーヒーを飲むものと私達が理解している限り、その意義を保ちます。しかしながら、ひっくり返して——もちろんその表現自体からしてどれだけ私達とコーヒーカップとの関係が規格化されているかが表されている——片方の端に金属片をつけた短い紐を、コーヒーカップの中央部につけてたらし、ひさしの下にぶらさげ、それがこの物体の標準的な扱い方となったら——それは風鈴と見なされることになるだろう。テーブルについた時にコーヒーカップを見ると、手を伸ばせばとれるように見える。そのことは、コーヒーカップが容器の一種である事を表している。またドアの前にたてば、ドアは開けられたり閉められたりする物体に見える。私達はドアをそのように見るように慣らされているのだ。だから、もしドアがねじれて取り付けられていたり、ただの玄関のように見えるのに、道のど真ん中においてたりしたら、戸惑わずにはいられないだろう。

このような意識を持って周りを見渡せば、実際物体は私達の気づく以上に私達の見方を制限しているということが分かる。物体はとても限られた方向で、私達をそれらに関連付けようとしているからである。私達の標準的な見方を不安定にすることによって、私達と、周りにある物体との関係が変化し、それによって今度は物体のまさにその意味が変化するのは、このためである。

しかし、もちろん物体の意味を変化させるのは簡単な事ではない。もし突然、なじみのある何らかの物体を異なった見方で見る事になったら、必ずや幾分かのちょっとした好奇心を感じる事だろう。しかしこれが単なる偶然の出来事であるならば、私達の見方はすぐに安定化し、標準に戻る事だろう。単にコーヒーカップを逆さまにひっくり返しただけでは、コーヒーカップとしての意味を本当には変えないのはこのためである。その意味を本当に不安定にするためには、「標準」の状態を変えるか、今基準となっている見方を新しい方向に向けねばならない。今現在私達が「逆さま」と呼んでいるものが標準となり、コーヒーカップを机の上におく標準的な方法と考えていたものが逆さまとなった時——それが、コーヒーカップがコーヒーカップであることをやめた瞬間である。そうすると、私達は、その物体を見る方法だけでなく、それとの関係そのものも変えねばならなくなる。写真はその点において、写真家と物体との関係を表す物である。この章に出てくる写真は、たまたま倒れた、又は人工的な創作をしようとする者が撮ったのではない。つまりくことや倒れる事が日常生活の一部となっている者が撮っている。だから、それらの写真の持つ力は単に映像としての演出によるものではなく、それらを撮った者の身体によるものもある。上下逆さまの写真には、ひっくり返った体がつきまとう。倒れた体からの視点は、標準化された見方に挑む。それらの写真を、われわれが常日頃規範として用いている視点の内で見ると、それらの中から生ずる新しい意味を完全にとらえる事はできない。それにも拘らず、私達はそのような制限の中でさえ、それらの写真が「何か」を不安定にし、変形させる力を持っていると感じる事ができると私は思う。

The Fall Guy

Martin Bruch は転ぶ。それもたくさん。そして転ぶごとに、転んだ後の視点での写真を撮る。今までに366枚撮ってきて、それは彼を転ばせた出来事を起こった順番に記録した写真となっている。彼の歪んだ写真は、オーストラリアやベネチア、ビエンナーレで展示されてきて、来週ロンドンで公開される。

ブルースはこだわりのある男だ。彼は会う人すべての写真を撮り、その一方、音を管理するという昼の仕事では、ドアのきしる音を調節するのに忙しくしている。「想像しうるすべてのドアは開いたり閉じたりしている。玄関にドアがあって、木のドアだったり金属製のドアだったり…」彼はまた、仕事で写真関係のプロジェクトも抱えている。ある赤いソファに座る人すべての写真を撮るといふものである。もう一つのプロジェクトはトランクと

呼ばれている。「街に出た時は、開いた車のトランクを撮る。決して終わる事はないよ。何百万もの車があるからね」

1961年にチロルのハルで抽象画家の息子として生まれた。彼のお気に入りの芸術家は環境芸術家の Andy Goldsworthy, 大聖堂などを包むアートで知られる Christo と Junne-Claude 夫

婦、フェルトや動物の脂肪を用いた彫刻で知られる Joseph Beuys だった。彼の持った初めてのカメラはプレゼントとしてもらったものだった。ロモ社の、重くて不細工なもので、ロシアのレニングラードの光学器機工場で作られ、1990年代の熱狂的な芸術ブームを突如生じさせたカメラだった。旧ソ連時代のカメラはばかばかしいほど技術のないしろものであったが、愛好家たちはその写真にかかるかすみを愛するようになった。ブルースはこのロモを愛していたが、1250枚撮っても50枚しか、何とか使い物になるものがないと分かった後は幻滅を感じた。

そして彼の平衡感覚が、多発性硬化症によってゆらぎ始め、転ぶようになった。「ある日転んだ時、誰も今まで撮った事のない景色であると思った。やみつきになり、自分がそれを写真におさめねばならないと確信した。写真家のほとんどは床に寝て写真を撮ったりはしないから。」そして1996年の5月、彼は転んだ所、厳密に言えば転んで地についた場所から写真を撮り始めた。彼のあだ名は「壊れる」とか「衝突する」という意味の Bruthlandwangen (=crashlandings) だった (crashlanding = 緊急事態のために機体の破損を覚悟の上で不時着する事)。

優れた腕前には興味がない。「僕はいつもコダックの FunFlash というカメラを使っている。とってもシンプルで、99.9%リサイクルできて、もし僕がそのカメラの上に転び乗ってしまったとしても、壊れないんだ。」彼には別のルールもある。それは、いつもフラッシュを焚き風景写真を撮るとのことだ。(水平方向に見る時、眼鏡を水平にかけるように。)そしてそれらを小さく見せるのだ。「人々はいつも、「ゆっくり写真を引き伸ばせ」というが、私が思うに、写真にもっと近寄って引き伸ばすのが一番いいのです。」

そのスナップ写真はほとんど計算されたものではなく、クラクラする風景を逆さまにした世界を垣間見せる。階段が突然立ちふさがったり、建物が曲がったり、道路が垂直に跳ね上がっていたり。時折、倒れたイスによって、彼がどのように倒れ落ちたのか分かる。彼のスクーターが何枚かの写真の隅でほのかに輝いている。後の方の写真では、彼の車いすの輝く取手が大半を占めるようになる。「写真は僕の病気が悪くなっていく年代記なので」と彼は言う。MS (=多発性硬化症) に苦しむすべての人がこんなにたびたび転ぶ訳ではないが、それでも多くの人には彼のやるような危険を冒そうとはしない。「ワイルドで、冒険的だ。車いすに座り、押し出されるんだから。」

写真に写っている人々はおもしろがったり、困惑したり、ぎょっとしたりしている。一つの写真では、緑のビロードの服を着た双子の年金生活者が、不思議の国のアリスに出てくる女王のように、からかうような顔をしている。もし人々が彼を助けようと駆け寄り、

カメラをさっと取り出せないくらいひどい転び方であったりしたら、その場所や日付や時間を記録するために黒写真をとる。ある黒写真は、エスカレーターを後ろ向きのまま落ちた時の事を記録している。「少なくとも僕がエスカレーターの6ステップ分の大きさだということ分かるね」と彼は言う。

彼は車のトランクを撮る。なぜなら「そこは公の場所での個人的な領域だから」で、人前で転ぶ事ほど個人的かつ私的な事はないからである。それはただ単に一目にされられることではなく、見知らぬ人があなたを知っている気になる方法なのだ。人々の反応を記録することで、彼は立場を逆転させ、人々を彼の観察対象としてしまう。

彼の次のプロジェクトとして、Handbike 映画がある。頭にカメラを取り付け、開けた道をスピードをあげて走る。車が遠くに撮影され、彼の3輪の車いすから通行を記録する。しかし彼は雑音については気にしていない。ウィーンのリングストラッセ道路で、車の騒音に負けじと叫ぶ彼の声をほとんど聞けないくらいに大きいものだった。「これが僕の伝えたい事だ。」と叫ぶ。「雑音だ。雑音の中にも静けさがあると思わないかい？」ひどく怒った運転手がクラクションを鳴らす。「僕が怒らせたんじゃないよ」と彼は言う。今までにパリとウィーンで撮影した。次はロンドンだ。「とりつかれているよ。」彼はまた、今だに倒れた時の写真も撮り続けている。

他の写真家達は、絵筆と違ってカメラはほとんど身体の一部で、もう一つの目なんだという考えを漠然と抱いている。Susan Sontag いわく、「写真は単なる映像ではなく、現実の解釈をするも

のである。また軌跡でもあり、本物から直接写し取った、足跡や死面のようなものである。」ブルースの作品における写真は、ほとんどレントゲン写真のようなものだった。落ちた時の感傷や、病気がどんどん悪化するのを記録することが出来る点において。

Bruchlandungen は彼の驚くべき積極性の記録であると同時に、MS との葛藤の記録でもある。写真は別の機能も果たすのである。「写真を撮るのを恐れてはならない」という。「撮るまさにその時になって写真を撮る瞬間、感傷に浸る時間はない。」彼にとって、写真は悪い思い出ではなく、生きている証なのだ。「私は366回、転んだときに写真を撮った」と言う。「写真を撮っていないなくても、転んだのはさらにたくさんある。でも生きているよ。」

Section 13 SONG

Introduction

人間の言語の決定的な特徴の一つは、構造の複雑さだ。広義における言語は人間に特有というわけではないが、動物の言語には人間の言語の構造に匹敵する精巧な構造が欠けている。ここで簡単な例をとってみる。ある猫が他の猫にニャーと鳴いて何らかのメッセージを伝えるのを目にすることがあるだろうが、m の音はそのメッセージの一部を伝え、eow の音が残りのメッセージを伝えているというのは誤りである。このメッセージは不可分な一体となっていて、相互的な構造はない。『ドリトル先生物語』のようなファンタジーを除いて、動物

のコミュニケーションはいわば文章でなく単語に基づいているのだ。私たち人間自身の言葉は時に「火だ！」など単独の単語で成り立っていることがあるのは事実で、かの有名な無口の日本の夫は、家で「風呂」「飯」「寝る」以上のこ

とを言わないことが本当にあるのも事実だ。しかしそのような例は原則をかえって明らかにするただの例外で、私たちは精緻に構成されたメッセージを表現するために、複雑に構造化された文章をすすんで用いることができるのだ。他の動物の簡素な言葉と、高度に構造化された人間の言語とのギャップは大きい。人間の言語はどうやって現在の形に発展したのだろうか。言語の進化について

て考えるとき、人間は自分が思い描いている複雑な意味を表現するために、単語を構造化された文章へ組み立てる複雑な方法、つまり文法を発達させたということがしばしば暗黙の前提となるであろう。この観点に立つと、文法と意味は密接な関係を持って発達し、より洗練された意思伝達の道具を必要とすることがこの発達の推進力となっていたといえる。しかしジュウシマツの歌のよく発達した文法立った構造は、その存在はこのセッションの著者によって発見されたのだが、何の複雑な意味も持たない。というのも、その歌は他の普通の鳥の求愛鳴きのような、ただ「恋人になって！」という意味しか持たないのだ。それならなぜジュウシマツはわざわざ複雑な「歌の文法」を発達させたのだろうか。この問いに答えるには、ただ複雑な歌の魅力的な質だけに言及するだけでは不十分だ。なぜならそれは、なぜ複雑な歌が魅力的に聞こえるのかという更なる問いをもたらすだけだからだ。複雑な歌はより捕食動物の注意を引きやすく、このことによってその歌が進化論の観点からますます理解し難くなっているように思われるということにも言及すべきなのだ。

このセッションで、筆者は、神経行動学の科学者で鳥の聴覚を研究しているのだが、ジュウシマツの歌の発達に対する非常に興味深い進化論的な説明を提示しており、同じような説明が人間の言語の進化にもあてはまるとの仮説でセッションをまとめている。化石のような、決定的なヒントとなる明確な手がかりは何もないため、人間の言語の起源についての論理は主として推測の域を脱していない。その起源は、突然変異や異常気象や進化論では説明のつかない現象だと示唆する人もいるが、筆者の仮説では、人間の言語の起源という昔からの問題に対して、進化の観点からの新しいアプローチを提案している。彼の仮説

によると文法は、生き延びるためには無用なものであれ、性選択に迫られて発達したものである。このことによって人間の言語を、ある機能の必要性による必然の結果として捉えるのではなく、進化という背景の中で理解することができる。自然界は非常に複雑で、それぞれに機能を果たすための様々な動機が相互に影響し何の機能も果たしていないように思える不可解な特徴が生じることがあるのだ。

Section 13 SONG

Finchsong

人間の言語は様々な方法で組み合わせられた単語で成り立っている。単語は比較的固定された意味があり、単語を組み合わせる過程は決まった規則に従っている。言い換えると、人間の言語を可能にしているのは意味の組み合わせと文法なのだ。小鳥の鳴き声の仕組みはこれとは随分異なる。文法の規則に従って意味のある言葉が組み合わせることができるのではなく、小鳥の鳴き声には二つの異なった種類の音がある。第一に単独の音である地鳴き、第二に一連の音要素から成るさえずりだ。地鳴きは意味を持った単語に喩えることができる。しかし連続したさえずりの意味を、それぞれ意味を持つ別々の要素に分解することはできない。言い換えると、地鳴きの音は個々に意味を持つ単語に相当する一方、鳥はそれらの音を組み合わせる文を構成することはしないということだ。さえずりに文法はなく、音要素はある方法で組み合わせられているが、それらの要素はそれぞれ別々の意味を持っている訳ではないため、文法を操って様々な意味を作り出すことはできない。従って、鳥の鳴き声は人間の言語とは全く違うパターンに従って行われる。それでもなお、鳥の鳴き声を研究することで（その鳴き声においてコミュニケーションのための役割は単語と文法で大きく異なるのだが）、人間の言語の起源に関する何らかの手がかりが得られる可能性はある。

小鳥の鳴き声において、さえずり（歌）はそれ自身に何の明白な意味も持たず、ただ雌の鳥に魅力的に聞こえることだけを目的としているが、その一方、地鳴き（呼び声）は特定の意味を持ち、それぞれの呼び声が違った目的のために使われる。まず地鳴きに注目してみよう。最も良く使われる地鳴き（呼び声）は触れ合い鳴き（contact call）である。この鳴き声はただの「こんにちは」のような機能を果たし、群れの中の鳥の間で時々交わされる。ほとんどの研究者がこの触れ合い鳴き（contact call）は自分に敵意がなく友好的な態度であることを示すために使われているのだと考えている。そして隔絶鳴き（distant call）というものも存在し、これはある鳥が仲間を一匹も見つけられないときに使われる。「どこにいるの」と尋ねるようなものだ。この音は触れ合い鳴き（contact call）と似ているが、音量がより大きい。ジュウシマツにはもちろん二つ耳があり、一つずつ頭の側面に付いている。そこで、片方の耳に音が届く時間ともう片方の耳に音が届く時間の間の隔たりによって「どこにいるの」との鳴き声がどの方向から来ているのか判断することができる。興味深いことに、ジュウシマツの間で、隔絶鳴き（distant call）の音質は個々の

鳥で違うだけでなく、これによってある群れの中のどの鳥が鳴いているのかを正確に知ることができるのだが、もっと一般的に、性によって異なっている。雄のジュウシマツははっきりとした声で鳴くが、雌のジュウシマツはよりかすかな声で鳴くのだ。

三つ目の重要な地鳴きのタイプは、警告鳴き (alarm call) である。ほとんどの小鳥にとって鷹や鷲は大きな脅威である。そこで、これらのような捕食者が近づいたとき、攻撃されやすい鳥は警告鳴き (alarm call) を発し、近くにいる他の小鳥に危険を知らせるのだ。しかし警告鳴き (alarm call) は諸刃の剣で、広く警告を発すると同時に、捕食者に警告を発している鳥が隠れていることを知らせてしまう可能性もある。この脅威に対抗するため、小鳥は警告鳴き (alarm call) に非常に有用な改良をした。下図は様々な鳥の警告鳴き (alarm call) を示している。これらの鳴き声は7kHz のあたりに集中している。鳴き声は徐々に始まり約0.5 秒続き、またも徐々に消えていく。開始と終了がはっきりしていないために捕食者である鳥は右耳と左耳に音が到着するのにかかった正確な時間の長さを知ることが難しい。これによって捕食者は鳴き声の発信源を正確に決定しにくくなる。この鳴き声には音要素がほとんどないということ（言い換えると、その周波数が限られていること）もまた敵が警告を発している鳥が隠れている正確な場所をわかりづらくしている。さらに、鷹や鷲などの鳥は7kHz 周辺の音を探知するのが難しい。鷹や鷲は非常に鋭い聴覚を持ち、落ち葉の下をちょこちょこ走り抜けるネズミの音さえ探知することができるのだが、警告鳴き (alarm call) の周波数には比較的反応しにくい傾向がある。言い換えると、小さな鳥と大きな捕食者の両者の進化の過程で、より攻撃を受けやすい鳥は、自分の居場所を探知されないで済み、それによって攻撃を回避できる警告音の類をきちんと発達させてきたのだ。

単純な呼び声から、歌、つまりさえずりを構成する独特な音信号の連続に話を戻そう。動物や鳥は一般的に、コミュニケーションのために多種多様な音を使う。しかしこれらの音の大多数はただの音声である。実際に特定の音信号の連続が持つ意味に注意を払う生物は、鳥と人間とクジラだけだ。これらの動物から音信号を習得する機会を奪えば、または異なった種類の音を出す別の種類の動物に育てられれば、言葉や歌を発し解釈する能力を失うだろう。私が研究しているジュウシマツは、八つの異なった種類の音要素を使って歌っている。雄の鳥が雌の鳥を魅了しようとして歌を歌っているとき、雌の鳥は実は自分で歌うことはない。彼女たちの役割は、雄の鳥の歌を注意深く聴き、どの鳥をつがいとして選ぶかを定めることなのだ。雄の鳥の脳には、歌を習得することと、歌を歌うことを可能にしている神経系がある。一方雌の鳥の脳には、歌を習得するための神経系は含まれているものの、歌を歌うための神経部分が欠けている。代わりに、この部分は歌を解釈するための組織に変わっていることが多い。

ジュウシマツの歌を構成する音要素はいつも同じ配列で組み立てられているわけではない。それどころか、その配列は歌う度に変わるのだ。それぞれの音要素はそれ自身に特定の意味を持たないため、配列が変化しても意味は何ら変化しない。従ってジュウシマツの歌に

関する第一歩となる研究テーマはこの多様性の解釈に関するものである。具体的には、なぜ鳥は異なった配列を考えだそうとするのか、というものだ。

今日の日本のジュウシマツは、全て実は約250年前に九州の大名によって輸入されたコシジロキンパラの子孫である。興味深いことにコシジロキンパラ自身は、普通八つの音要素から成る非常に簡素な歌しか持っていない。このこと自体はジュウシマツと何ら変わらないが、ジュウシマツが歌に様々な配列を取り入れている一方、コシジロキンパラは歌を歌うときこれらの音要素をいつも同じ配列で発するのだ（グラフ参照）。よって、ジュウシマツの歌に関する第二の研究テーマは、なぜジュウシマツとコシジロキンパラは基本的に同じ種であるにもかかわらず歌に大きな違いがあるのか、ということだ。この問いに対する答えは性淘汰にある。

性差の存在するどの種においても、生殖のために大きな犠牲に耐えなくてはならないのは雌である。このため、雌は将来つがいになる可能性のある鳥の能力を注意深く調べる傾向があり、結果として雄は将来つがいになる可能性のある鳥の気を引くための誇示行為を容易にするように進化してきたのだ。雄の美しい尾羽はこの類の進化した誇示行為の良い例である。私の理論は、ジュウシマツの歌の複雑な文法はこれに類似の誇示行為で同じような過程で進化してきたということだ。この理論を検証するため、雌のジュウシマツを別々の鳥かごに入れ、様々な人工の歌への反応を調べた。その結果、より複雑な歌を聴いたグループは、簡素な歌を聴いたグループの半分の日数で卵を産んだ。複雑な歌を聴いたグループはほぼ2倍の小枝を巣に運んだ。その後同じ実験をコジキンパラに対して行った。コジキンパラの簡素な歌をジュウシマツの複雑な文法に合うように配列し直して、これらの作り変えられた歌を雌のコジキンパラに聴かせた。雌のコジキンパラははっきりと人工的に配列し直された、より複雑な歌を好んだ。

しかしなぜ複雑な歌は鳥を刺激して生殖のために活発にさせるのだろうか。妥当な説明が鳥類学者アモツ・ザハヴィ (Amotz Zahavi) が提案した「ハンディキャップ原理」の名で知られる理論の中に見出せる。言うまでもなく、複雑な歌を歌うことは野生の鳥にとって危険な行為である。例えば歌っている鳥は敵の注意を引いてしまい、より根本的に言えば、歌うために必要な神経系を保持することは、本当に必要というわけではないのだ。この類の、不必要な飾りのための能力を持っていることは、その個体は特別な力を持ち、それゆえに生存のためより強い能力を持っていることの証拠である。野生のコシジロキンパラが複雑な歌を歌って雌を誘惑しようとするにあまり多くの時間とエネルギーを使いすぎれば、たちまち捕食者の餌食になっていたであろう。しかし複雑な歌を発達させたジュウシマツは人間のペットで、そのため捕食者によって危険にさらされるという心配をする必要がなかった。彼らをとりにまく状況がジュウシマツに複雑な歌のレパートリーを発展させ始める機会を与えたのだ。

私は人間の言語（意味のある単語の文法的な配列）が同じように進化したのだと確信している。言い換えれば、生殖のための活動に関係して進化したということだ。様々なダンス

や歌、これは将来の連れ合いを魅了するために使われる芸なのだが、これをうみだす能力は、ジュウシマツの歌の文法のように次第に複雑になり、これによって人間はついに歌やその他の芸のように多種多様な記号の配列を制御できるようになるのである。この主張の基本にあるのは、私たちが文法と呼んでいる多層的に配列された規則のようなものの進化のために、意味のない複雑性の発達を促進させる性淘汰の一形態があるに違いない、という考え方だ。この類の性淘汰は、個々の生存のために必要な能力の進化というよりは、「不必要な」能力の進化を可能にする機構なのである。